

## 金沢大学社会教育研究室季報

No. 15

1966 : December

### 目 次

社会教育と地域住民の自発性	神力 甚一郎 ..... 3
思想の空洞化と公明党の進出	戸頃 重基 ..... 4
建国記念日と家庭の日に関し	中野 光 ..... 7
生活と「ことば」	沢田 忠治 ..... 9
社会教育的な短歌指導の一面	藤田 福夫 ..... 11
石川県下の社会教育の現状 No. 7	
社会教育会館	中野 巳之吉 ..... 14
金沢市の青年学級の現状と問題点	吉川 実 ..... 21
研究生のページ	
研究生として入室して五年	米田 民男 ..... 25

特 集

金沢大学社会教育研究室昭和41年度共同研究集会

第 3 回 記 録 .....	28
第 4 回 記 録 .....	33
第 5 回 記 録 .....	48
金沢大学社会教育研究室昭和41年度の歩み .....	70
No. 3 (1966. 9. 16 ~ 11. 30)	

## 社会教育と地域住民の自発性

神 力 甚 一 郎

社会教育は本来、地域住民の自由な意思に基づく主体的参加を期待し、住民自身の自主的な学習活動によつて支えられなければ成立しない教育事業である。学校教育は義務教育段階においては、一定の年令のすべての青少年を就学させる法的拘束力をもっているし、義務教育段階以上の学校教育にしても、社会的、経済的に有利な就職の条件としての学歴もしくは資格付与を最大の誘因としてもっているが、このような法的拘束力や誘因をもっていない社会教育は、国民大衆や地域住民の自由と自発性を前提にし、自発的参加に期待する他に途はないであろう。

したがつて、民衆の自発性に訴え、それを掘りおこし、民衆自身の自主的な学習活動を活発にするために、社会教育の計画、学習内容、学習方法に格別の工夫をこらさなければならないということは、いつの時代の社会教育にとつても避けることのできない根本問題であるが、とくに近年の高度経済成長下にあつて、国民一般の関心が「もうからない」社会教育よりも「もうかる」仕事に向けられ、また現代の大衆文化がもたらした享乐的傾向のために社会教育が伸びなやんでいる今日、どうすれば社会教育に国民大衆ないし地域住民の主体的参加を期待できるかという問題は、社会教育指導者が当面する最も重要な問題である。

ところが、民主主義の成熟をまたないで、いわゆる「上からの近代化」によつて近代国家の建設を進めてきたわが国の社会教育の特殊性として、国民の自発性に基づく自主的活

動の弱さが指摘されている。

強大な国家の権力支配構造とそれにつらなる地域の古い秩序を背景にした戦前の社会教育においては、国民の自発性を開発する努力を怠つても、権力ないし義理人情の拘束力によつて多数の国民を社会教育に動員することができたが、戦後の社会教育においては事情は一変している。周知のように、戦後の社会教育は、国民主権の新憲法のもとに、社会教育の主体は国家もしくは地方自治体ではなくて、国民自身であるとの原則に立つて、すべての国民の自由と自発性に信頼して、国民大衆の自主的活動によつて支えられた民主的な社会教育の展開を期することとなつた。

だが、長年の歴史と伝統によつて形成されてきた国民の意識の変革は、もとより法律や制度の改革のように一挙に達成できるものではない。戦後20年を経た今日においても、国民大衆や地域住民の自発性に支えられた自主的な学習活動が伸び悩んでいるのもそのためであると思われる。

したがつて、「当面する日本人の課題」の一つとして、「民主主義の確立」が要請されている今日、(中教監「期待される人間像」参照)民主的な社会教育の原理を再検討して大衆の自発性を掘りおこし、大衆の自主的な相互学習としての民主的な社会教育活動を活発にするための方法を研究し工夫することは、今日のわが国の社会教育に課せられた最大の問題であるといつてよからう。

ところで、民主的な社会教育において国民

の自発性と自主的活動が尊重されなければならないということは、民主的な社会における社会教育活動が国民の自発性によつて支えられ、国民の自主的活動を中心として推進されなければならないという社会教育の方法原理であるとともに、社会教育が目ざす人間像が自主性を豊かにもつた自律的人間でなければならないという意味において、同時に社会教育の目的原理でもあったと考えられる。

中教審の「期待される人間像」は、「日本人に特に期待されるもの。」として、まず最初に「個人の自由」を挙げて、学校教育と社会教育をふくめて今後の日本教育が目ざす人間像は「自由に思慮し、判別し、判断して行為することができる」自由の主体としての自主的人間でなければならないと説いている。また政治学者の蟻山政道氏は「新日本のビジョン」と題する論文の結論として、「われわれ日本国民の為すべきことは、自律的人間への成長

に努力することだ」と述べて、自律的人間とは、「人間が拘束され、従属せしめられている社会的文化のおよび経済的政治的な諸制度や文化的風土に対して、これを乗越える自由と能力をもっている個人をいう」と定義している。

以上のような意味において、国民大衆もしくは地域住民の自発性と自主的活動は、今日の社会教育の方法原理であるとともに、目的原理でもあったといつてよい。では、このようにすべての国民が自律的人間に成長することを目ざして、民衆の自発性を方法原理とする社会教育は、具体的にいうと、どのように企画し、実践的に展開したらよいであろうか。この問題こそ、わが国の社会教育方法論研究の基本問題であるが、この問題について私見を述べることは、別の機会にゆずることにした。

(金沢大学教授・教育学)

## 思想の空洞化と公明党の進出

戸 頃 重 基

### ※ 黒い霧のなかの保守と革新

今年1967年は選挙の当り年となりそうである。戦後、何回かにおよぶ総選挙の繰り返しによつて、日本の政治はちつとも改善向上のきざしがなく、最近、底なしの黒い霧事件の示すように、ますます悪化の一路をたどるばかりである。スターリンの独裁政権は30年間続いたが、日本の保守独裁政権は、まだそれにおよばないとはいえ、すでに20年を超過した。倦怠、絶望、退廃、不安、自嘲、逃避の風潮が、よどんだ臭い政治社会のドロ沼から発生したのも、当然といわなければ

ならない。しかし、このような結果を招いたについては、保守党にも劣らない主流・反主流のお家騒動ばかり演じて、団結という最大の武器を放棄した革新政党自体にも大きな責任がある。保守政治家たちが、いわば安心？して背徳の悦楽をむさぼれるのも、革新政党が無力だからである。このようなとき、一枚岩の団結を誇る公明党が、隙をついて進出した。

### ※ 公明党と西独のNPD

保守党がどんなに腐敗墮落したからといって、また鳴り物入りの総選挙が行われたから

といつて、革新政党が、それにとつて変わる徴候は何もない。国民支持率の相当の激減ぶりを立証しながらも、またぞろ登場するのは、汚職の体臭を発散する史上最低の保守政権にきまつている。眼前には、政治的腐敗が展開し、それに対決する革新政党は、厚壁に直面し、ブチブル化した大衆は、地獄のうえて花見の宴に興じているとき、生活の窮状を訴える人びとは、日ましに増加の一途をたどるばかりである。鬱情の蓄積は、何処かで爆発せずにはいない。この先行不安の社会相は、私たちに、ファシズムの台頭した昭和初年の日本を回想させる。西独では現在、旧ナチス党員の多数参加しているNPD（国家民主党）が躍進を開始したが。公明党の進出状況は、従来の保守、革新についていけない階層の欲求不満を代弁している点でNPDに比較できる。

#### ※ 衆院選に賭ける第3党の狙い

公明党は、32名の候補者を立て、来るべき衆院選に進出しようとしている。参院選とちがつて、地方で、キメの細い闘争を進めなければならない衆院選では、公明党も苦戦を覚悟のことと思われる。大都市に強く、農村部に弱い他の革新政党と、共通の悩みが公明党にもある。たとえば、福山市では、参院選のとき、約13,000票獲得した公明党が、同市の市議選では、約6,700票しかとつていない。地元民と現役議員とのコネを、どう切りくずすか、公明党の選挙参謀・運動員も頭の痛いところだろう。

しかし衆院選に初登場の公明党は、今後の党勢伸張をこの選挙に賭け、その真剣な気がまえば、黒い霧の中の傷だらけの保守党や、タガのゆるんだ革新党を、完全に圧倒しているから、相当の進出も予想され、公明党が民

社をぬいて、衆院で第3党になる公算は大きい。

#### ※ 自民と民社の中間—公明党の路線

公明党は、その政策が国民の一部から高く買われて進出したのではなく、この党の掲げる政策は、すべて他の革新政党からの借りものばかりである。ときどき社共両党なみの赤い気焰を吐くけれども、政治路線は、自民と民社の中間にある、と見ている。公明党に独自の色があるとすれば、それは他党をして、「政策論争のいどみようがない」とあきらめ顔をさせる日連信仰者の団体にすぎない、ということだけである。それにもかかわらず、公明党が、進出を予想される背景には、歴史の日の浅いことがプラスとなつている。他の政党のような、汚職、乱闘国会のごとき歴史の垢を身につけていない若さと新しさが、公明党に溢れている。しかしただそれだけのことであつて、政党にとつていちばん大切な政策と綱領原理は、すべて附焼刃にすぎない。そういう公明党が進出するのは、現代思想の何を象徴しているのか。

#### ※ 思想空洞から踊り出た妖怪変化

公明党の進出する状況は、現代思想の空洞化現象ときり離して考えるわけにゆかない。思想空洞化は、憲法改悪の動きによつて、まず意識的に工作された。

日本人はムードに弱い。考えるより感じることで行動する。インド人は本を読まないがよく考える。フィリピン人は本を読まなければ考えもしない。日本人はこの中間にあるといわれる。つまり日本人は、本をよく読むが、考えようとしないう民族だといわれる。これは外国のあるジャーナリストの批評である。考えることに弱い日本人の証拠をあげろ、と

いえば、いくらでもあげられるが、ここはその場所ではない。とにかく考えることに弱ければ、どうしても人は感情的に行動しやすくなる。創価学会会員のエネルギーな行動は、考えることに弱い、考えることを好まない日本人の典型を示している点で他人事ではない。思想空洞からは妖怪変化が踊り出す。

### ※ 信条闘争時代と懐疑精神の落丁

「知は力なり」(Scientia est Potentia)といわれる現代の科学時代は、また、「信は力なり」といつてよい信条闘争の時代である。信条をいつたん異にすると、相互の間に「通心」(コミュニケーション)を可能にする思想の橋がかけられない。K・マンハイムは、イデオロギーとは、相手の考え方は、無価値であるとキチンと整理することであると定義した。このような、事実をありのままに観察しないイデオロギーが、信条にまで固定すると、人間は全く始末におえなくなるものだ。目隠しされた馬車馬のように突進することしか知らない。

真実という日本語があるけれども、真と実は必ずしも同じではなく、これを見分けるために、事柄を常に疑って見る懐疑の精神が何事も虚々実々の宣伝戦と信条闘争のはげしいこんちきわめて大切であると思う。国立戒壇を大まじりに信したりするのは、懐疑を忘れ、知位を無視した現代の病理を象徴する。

### ※ 公明党は和製回教徒集団

公明党は、その進出状況からいえば、前にいつたように西独のNPDに似ているが、政教未分を体質としている点では、回教徒集団と比較できる。倫理学者和辻哲郎は、親鸞を基督教型、道元を本来の仏教型、として日連を回教型に比較して、鎌倉仏教に、世界の三

大宗教の型が創出されていることを指摘した。だから回教型に比較される白蓮の垂流を汲みあげるものが、こんちき回教徒的な政教未分を夢見る公明党を結成したのも、けつして偶然でない。しかし、日本は、アラビアの砂漠ではない。日本の宗教分布図は、アラビアと比較にならないほど多彩をきわめている。それでもおそらく一億の人口中宗教人口は約3千万をこえることはないだろう。創価学会が公明党を結成したのも、無宗教人口の多い日本での進出の厚壁に直面したからである。かりに彼らの自称するとおり信者の数が1千5百万を算するとしても、それは恐れるに足りない思想空洞から踊り出たマイナスの大衆である。

※ 宗教で個人は救えても社会は救えない  
ただこんちきは、そういうマイナスの大衆を、プラスに転化して、彼らの持つエネルギーを前向きに組織しうる、力に富んだ思想がない。帝国主義、民主主義、社会主義、平和主義、実存主義、マルクス主義、ナショナリズム、プラグマチズム、みんな出揃ってはいるものの、それらに序列と選択基準を与える現代思想の教義判釈が、大衆自身によつて受容されていないならば、思想に代つて、信仰が彼らに方向を与えるだけであろう。私は信仰が個人に対して、生きがいや人生の方向を与えることの必要を認める。しかし公教育や政治にまで介入して、信仰が、方向づけることに絶対反対だ。信仰は、個人を救済できても社会を救済することはできない。こんちき必要なことは、大衆の個々が、めざめて歴史の創造に参加できるように仕向ける思想である。専門化し分業化した学問の深い谷間を埋める、人生に統一的な指標を示す思

想こそが必要なのである。

#### ※ 科学的楽天主義の幻滅と公明党の進出

人工衛星が宇宙をとびかい、やがて人間の月世界への旅行も夢でなくなろうとしているとき、人間が生活を営む、この地球上では、依然として貧困があり、病気があり、戦争があり、そして犯罪がたえない。科学・技術の進歩が政治・社会・制度のおくれと、余りにもズレを生じすぎている。科学が技術にリードされ、技術が科学に優先し、科学を方向づける哲学は貧困を極めている。人民の幸福と平和と便利に寄与する研究体制が、政治社会の構造として定着せぬ限り、科学と思想は無関係に並存し、迷信と妖怪変化は、社会を温床とすることをやめないだろう。

地動説の天動説に対する勝利以来、進化論の宇宙神話に対する勝利以来、宗教の權威はたしかに色あせた。しかしヒロシマに原爆第一号が炸裂したその瞬間から、科学的楽天主義は粉碎され、宗教の非合理的発言が幅を利かし始めた。公明党進出はその一例にすぎない。

※ 公明党の役割、それはスベリ止めである。

公明党の評価に消極的な私であるが、もしなんらかの積極的な評価を人に求めうれば私は、公明党を、すべり止めだといっておこう。スベリ止めとは、大衆の左右両極分解を食い止めるということである。

こんにち極右はヤクザ同様の暴力団と化し思想空洞これより極端なものはない。昭和40年7月の参院選で投げられた極右への票は、15万票、もしこんにち公明党のようなものがなかつたならば、極右、右翼になだれ込む大衆は少くあるまい。大日本愛国党などが、学会・公明党を敵視する理由はよく分る。しかし、同じ参院選で、公明党への投票は5百万票を数えた。敵視しても全く歯が立たぬ。また公明党は、大衆の極左、左翼への転出と流入を防止している。選挙となれば、民社、社、共がだしぬかれることははつきりしている。このスベリ止めは、日本の現状に必要な否か、それは読者に考えてもらいたい。

(金沢大学教授・倫理学)

## 建国記念日と家庭の日に関して

中 野 光

みょうな日が2つもつくられた、というのが私の実感である。

すでに以前からある「国民の祝日に関する法律」では、国民の祝日とは、国民がこぞつて祝える日でなければならない、と明記されているのに、少くとも国会で<sup>1</sup>/<sub>3</sub>の議員さんの反対の意向を無視して、この法律が改正(?)されてしまったのだ。これを強引におしとおした政府与党の意向は、いうまでもなく旧紀

元節の2月11日を「建国の日」として定めることにあつたのだ。審議会の答申をまつて政会できめるという手続きにしても、戦後の政治史上では例のないことだ、という。しかも、内閣はあの答申が出るや否や、まさに、電光石火・政令を公布してしまつた。「まつてました。」といわんばかりである。私の既成観念では審議会の答申というものは、たとい出たところで、実施に移すのには時間がか

かるものだ、そして全面実施という例はあまりない、という認識だった、が、今度ばかりはちがつていた。まったく、あれよあれよ、というところである。

建国の日、とは読んで字の如く「国が建つた日」つまり、国の創立記念日である。その日が2月11日だ、というのを、いつたいう説明すればいいのか、歴史学者や考古学者で神武即位説を歴史的事点として認めている人がいるのだろうか。明治政府の創作であることが事実なのだ。しかも、それは単なる事実ではなく、それがその後の日本の歴史的足跡を規定した政治を象徴した事実だ、となれば、ことは重大である。

「まあまあ、中野さん、そこんところはあんまり学問的にセンサクしたつてしょうがないよ。2月11日に日本の国が出来た、というふうに信じようじやありませんか、これから世の中が復古的になろうとするとき、あんたのようなことをいうと、あんまり得にはなりませんよ。」といつてくれる人があるかもしれない。しかし、そういう善意はせつかくだか受けつたくない。私は、いまの日本国憲法と教育基本法がすばらしいものだ、ということが、私の研究をおしてますますわかってくる。「真理と正義を愛する」国民の形成が、憲法や教育基本法のわらいなのだから、そして、それを守り育てる義務を負っている公務員のひとりなのだから、2月11日は、決して建国の日ではない、といわざるを得ない。「それでも地球が動いている」とガリレイがいつたように「2月11日は、それでも建国の日ではない」といつづけようと思う。

しかし、気の弱いぼくのことだから、そう

思つても、そのことが実行できるかどうかはあやしい。しばらく時が移りかわり「2月11日には各戸で日の丸をあげましょう」とか、「子どもや生徒は登校して儀式に参加し、この日をことほぎまつりましょう」「そういうことをしない人は日本国民ではありません」等々といわれるとどうなるのだろうか。ひよつとしたら無言の抵抗しかできないかもしれない。

日の丸にしても、最近はいろいろな行事についてまわるようになってきた。だが日の丸をかつぐことが愛国者のあかしでもあるかのよう考えるのだつたら、とんでもない、といいたい。ぼくは、もし占領下で、アメリカの命令を無視してでも日の丸をかけるのなら話はわかる。そういう人はえらいと思う。反動思想の持主にしたところでなかなか魅力的だ。しかし、あの時代には、日の丸をしまいこんでいて、いま頃になつて日の丸をあげ、そのことをもつて愛国心と結びつけるのが気に入らない。その点で、沖縄の人達が日の丸を祖国復帰のシンボルとしているのとは、わけがちがう。堀田善衛氏が「私は沖縄の祖国復帰がまちとれたら、よろこんで日の丸をあげたい」といわれたが、ぼくも同感である。

◇ ◇ ◇

ところで「家庭の日」だ。これが決められるうわさはきいていた。しかし、そんな日をきめたつて…というのが卒直な感想だった。家庭の日というのは、毎月第3日曜、この日は、みんなで家庭を大事にし、家庭人になるように心がけ、とくに親子の話し合いをするなど、それぞれの家庭をあかろくするように努力しよう、というのが趣旨なのだろう。今朝の北国新聞で勝尾金弥さん達が座談会をし



ておられるのを読むと、どうもそうらしい。じょうだんいつちやいけな。今の親たちはほとんどが、家庭を大事にしたい、と思つてゐるんだ。誰からいわれるまでもなく、たまには、菓子屋へ寄つて子どもにみやげを買つて帰りたいし、女房にもよるこばれるものを買つてやりたいと思つてゐる。しかし思つていてもできない、というのが高度経済成長政策下での庶民の実情だ。この日は家にいて…というのが現状認識としてはビントはずれではないか。日曜日でもかせぎのためには、やむをえず出かける人が多いのだし、日曜日だと、どこにも出かける金もなく毎日の労働で外出する気力がわかず、そのために一日ゴロ寝する以外に過しようがない、というのが多数の県民の実情である。

「いやいや家庭をおろそかにしている人は多いもんですよ。そのために子どもが非行化する例も…」とおつしやる方があるにきまつてゐる。しかし、そういう方には、ほくはむしろこういつてやりたい。

「そりやそうでしょう。しかし、私がいうのが一般的ですよ。だとすりや、まず家庭の日をきめて、その日の効用を信じ、宣伝する

人こそ、先ず家庭をだいになさつたらどうですか。内政不干渉といこうじやありませんか。」と。

といつても、家庭とか家庭教育について考えたり、人と話したりするとき、一ばん苦しいのは「出かせぎ」の家庭のことである。

「先生、どうしてうちのとうちやんは遠くへ働きに行かねばならないの。なんにもわるいことしていないのに」といつた子どもがあるという。この子どものことばにえらい人たちは何と答えるのか。出かせぎは政治経済の問題である。家庭の問題も政治、経済に根をおろしている場合がたくさんある。根がそこにあるのなら、解釈はやはり根のところで考えるべきで、心がまえや精神だけに求めるのはまちがつている。子どもと親・妻と夫が少くとも同じ土のうえで、同じ屋根の下に住い、生きることのできるために、政治家が、財界人が、教師が、そして働く農民や労働者が、何をどうしなければならぬのか、そのことをもつと深く、きびしく考えなくてはならない。

(金沢大学助教授・教育学)

## 生活と「ことば」

沢田忠治

先日、私は石川県農協婦人部の若妻研修会へはからずも、助言者として列席しました。

その会合で聞いた話の中で、これは思つたことがありますので、それを材料にして主題について述べてみようと思ひます。

その話をされた方は、能登地区の某農協婦

人部の部長さんで、60才を過ぎたと思われる老婦人でありました。

「最近では農村に嫁がこなくて、農村は大変困つてゐます。過日、私は農村のある家庭から息子の嫁を一人探して欲しいと頼まれました。その嫁の条件は3つあつて、その第一は

裕福な家庭の娘さんであること。第二は美しい人であること、第三は頭がよくて大学を出た方であること、でありました。随分欲深いなあ、と思いましたが、各方面を探しましたところ、その希望条件にやや叶った娘さんが見つかり、推薦して見合いをいたしましたところ、双方共オーケーでとんとん拍子に話がまとまって、私は 酌人となつて盛大な結婚式があげられ、やれやれと安心しました。

両家共満足し喜び合いました。殊の外、新郎の家では、「農村に嫁が来た」といつて喜ばれました。

ところが、約一ヶ月程たつて、新郎の家から呼び出しがあつて行つてみると、次のような苦情が述べられました。

うちの姉さんは、朝起きてお早ようございますの挨拶はなく、夜、就寝の時に休みなさいもいわず、食事の前後にも何の挨拶もせず、外出するときも行つて参りますもいわず、帰宅してもただ今帰りましたともいわないのですが、これでは困ります。あなたは 酌人ですから、姉さんの実家の御両親に、そのことを連絡して、実家の両親から必要な挨拶をするものだよと教えてもらいたいとのことでありました。こういわれて私もはたと困りました」と。しかも、この嫁さんは京都の某私立大学の英文科の卒業生でありますと、つけ加えられました。

この話を聞いて私は思いました。

この嫁さんの挨拶の問題は、親のしつけによるものか、学校教育によるものか、この人は英語は話せても、言うべき日本語が話せないのか。こんなお嫁さんは農村に来てはつとまらないのではなからうか。

否、都市生活でも田舎の生活でも円満な人

間関係は保持できないであらう。

大学を出た女性にこの種の女性は最近多いのではあるまいか、自分の水準を高く評価して、自分より劣る人間にこちらから頭を下げ挨拶などする必要はない。又、尊敬もしない人に何も礼をする必要はないと考える考え方が若い者に多いのではないだろうか。

農村でも都市でも、家族生活の中に、近隣社会の生活の場で、朝夕の簡単な挨拶はどんなに生活にうるおいを与えることか知れないと思う。

私自身反省してみると、ことば<sup>〇〇〇</sup>について、あれこれ言う資格のない者であることを十分に自覚しているのであります。

何んでもないことに激しい口調で、感情を高ぶらせて怒つてみたり、時々、喧嘩腰で口論したり、舌たらずで誤解をまねいたり、現在まで、幾千回となく言葉で失敗をしていることを知っています。

そのためか前述の婦人部長さんの言葉が身にしみて感じたのでありますが、今一つ思い出すことは、私は青少年の頃、無学文盲の母親から「人間というもの<sup>〇〇〇</sup>は、ことばでつきあうものだから、言葉に注意なさいよ。」と幾度も教えられたのでありますが、それを身につけずじまいにここまで来た不甲斐なさをしみじみ感ぜさせられます。

家庭内でも、近隣社会でも、友人間でも、職場においても、いうべきことは言い、言つてならないことはいわないように心掛けて、円満な平和な人間関係を作り、住みよい環境構成に努められたいものであります。

(金沢大学教授・教育心理学)

## 社会教育的な短歌指導の一面

—— 随 想 的 に ——

藤 田 福 夫

社会教育は意図的におこなわれる場合も多いのは勿論であるが、必ずしも教育を頭に入れずにやっている仕事がい通りの形で自然に社会的影響が生じていることもあると思う。

わたしがこんなことを感じるのは主として短歌指導に関してである。そしてその短歌指導にもまたいろいろのケースがある。すなわち最も特色的なものは刑務所収容者を対象とする場合であり、その他公民館などを会場とする短歌グループの集まり、放送短歌などである。これらはそれぞれ短歌を趣味的に学んでいただくもので、いわゆる歌人たちの集まりという本格的な歌会とはおのずから趣を異にし、指導者としては啓蒙性、参加者としては半レクリエーション的性格がともなうのである。客観的に見れば社会教育的機能がそこで果されていることになるのであろうが、私としては勿論社会教育というようないささか物々しい意識は全然持たずに、その集まりに顔を出しており、参加されたり、応募される人々も団体主催の社会教育大会とか、協議会とか、読書会とか、いつたものよりは遙かに気安い気持ちで、やはり遠い目的としては歌そのものが上手になりたいと考えていられるように思うのである。

しかし、これらは結果的に反省してみるとますます社会教育というもののねらつていることの一端を果しているようであり、歌そのものに上達していただいた以外の効果もあつたように思われるのである。これは全く期せずしてそうなつてくるのであつて、最初から

社会教育ということを目に打ち出した歌の集まりというものとすればこれは私も場面にのぞむのをはばかりたい気持ちである。

○ ○

さて金沢刑務所収容者の短歌指導を特志面接委員というむづかしい名のもとに委嘱されてから10年近くなつた。特志といつてもこちらから名乗り出て押しつけに行つたのでは勿論ない。先方からの依頼に応じて特志家になつてくれとのことであつたのだから変なものだが、依頼の役所、つまり、帰するところは法務省が薄謝しか出さないで、こちらの好意に甘えるという便利重宝な制度なのであろう。とにかく正式の教官とか、教戒師とかいう立場でないだけに気楽な気持ちで出かけて来た。回数も少く、収容者も次々と変つてゆくので、収容者との壁が無くなるとまでは行かないが、年をかさねている中に、大体収容者はどんなことを考えているか。どういう素質を持ち、どういう環境にあつた人が多いかは知られるようになった。そこで果している短歌の役割なども自然理解できた次第である。

文芸殊に詩歌は排悶の具であるから、収容者が父母妻子など肉親を恋しく思つたり、寒気をかこつたり、入浴時間の短さを嘆いたり、罰房のつらさを訴えたり、—— この3つは可なり多い取材である—— ちよつぱり女性思慕の情をうかがわせたり、転送途中の世人の白眼視をおそれたり、判検事や看守の言動に非常に敏感に反応したり、出所までの日を数えるようにして過ごしたり、ねばつこい強

い色彩や事物のラフな状態に共鳴したりするのを見ると、収容者の心の奥底に触れるのは宗教的角度のほか、この自己告白の深い抒情形式の持つ意義を改めて確認したりするのである。これはストレスのある面についてであるが、時には所内の工場での作業に積極的意欲を示すことも勿論あつて、出所後の職業安定とも考え合わせたのもしく思うこともある。

収容者の作品はお役所の方からいえば心情理解の好資料であると思うのであるが、収容者の側からすれば、収容者の気分転換が第一義であり、多少教養を進める上にも意義があるであろう。会合の席に集つて来る人は毎回2.30人ほどで、全収容者の5パーセント程度だが、その面持は仕事場へ出る時と違つてのんびりしたくつろぎが認められる。こちらが所内の役人でもない平服の人物であるという気安さもあるであろう。ことに冬季などは会場にはストーブがたかれているので暖気に縁の遠い収容者には何よりの魅力となつてゐることはその言動の上にもはつきりうかがわれる。気分転換の場になつてゐること、明らかなのである。そしてその作品の優秀なものは所内の「はくさん」というタブロイド版の新聞に載せられたり、名古屋矯正管区の雑誌や、時に所内で刊行される歌句集にも掲げられるから、佳品をつくることは収容者にとつて一種の名誉であり、この面からもストレス解消の役割を果しているということになるようである。作品について専門的なことは説かないが、よいもののよさを理解してもらつて純粋な芸術品の魂が多少でも洗心のよすがとなるように心がけているのは勿論であり、文字・用語など国語表現一般の啓蒙にも多少は

役立つよう心がけている。最近目についた2.

3の作を示しておこう。(氏名省略)

出所後の生活思へば不況にて

倒産相次ぐ帰住地おもふ

好奇の目注がるる駅の構内を

急ぎ通れり移送囚我は

言ひ返す言葉はあれど山茶花の

こぼるる庭を黙し掃きをり

点検を終りて施錠ひびかへば

心落ちつく如き思ひす

うづくまるそれぞれの影壁にうつし

男ばかりの夜がまた来る

冬の陽を背負いてチエン組みてゆく

卓上プレスにやすらぎ覚ゆ

電灯下げ角のみ使えば電熱が

えりにぬくみをほのかに伝ふ

0 0

公民館の歌会といつても現在私の関係してゐるのはただ一つ会場を石川郡美川町公民館に持つ「防風林」歌会のみである。以前、金沢市婦人会館のそれに約5年間関係したが、それは解消した。他の人が指導してゐられる同種の会、自主的運営で時に私のようなものが出かける他の公民館の会合も2.3は存在する。いずれにしてもこれらは同好グループの集まりで、専門作家の会とは違つてゐる。中には同人誌の作家もまじつてゐるが、全体の水準はさほど高いというものではない。中年以上の家庭婦人に2.3の男性をまじえた集まりである。美川の会のはじまつて3年目で、毎月小集があり、先般40余ページの小冊子歌集「防風林」を出すまでになつた。1.2の作を紹介しておこう。

ふきん掛に布巾悉く乾く刻

夏を愛する心ふと湧く

梶本須磨子

気がかりし若妻学級生まれ出で

我がことのごと喜びの湧く 川本富美枝

そこに集まられる人々の求めているものは何であろうか。それは表面に出ている意識としてはやはりよい作品を得るということであるが、それとともに1か月1回の教養的息抜き、気分転換の時間としての暗黙の中に参加者が互に承認しあっている意義も見のがし得ないのである。一応よい作品を得ようという考えは勿論うかがわれ、熱心な質問や添削要求も受けるが、作品そのものによる排悶や誇りのほかに家庭にとじこもりがちな人々が何かのはずみに楽しげに笑い、なげきをつぶやいてゆく姿により一層の意義を側面観として見出すことが多いのである。短歌・俳句の支持者の底辺にこうした階層が存することは第二芸術的性格の培養基であるともいわれるが、特殊な短詩型文学が広く普及して庶民層の中で果している社会的役割を肯定的に見る立場も是認したい。

〇

〇

療養所の収容者の歌もラジオ文芸の選をした関係で約10年近く見たが、そういう人々は家庭婦人より以上閉鎖された環境の中で、この短詩型に熱い力を注ぎ、これによつて現実の社会と細いパイプを通じ、わずかに社会人としての存在の自覚を確認しているかに感じた。またその人々は同好のよしみをもつて所内にグループを持つ、相互扶助の実をあげていようである。死去者の遺稿集を編まれて友愛・追悼の誠意を示されたこともあつた。極端には現代短歌は療養所で最も活潑に生きているとさへ言われるくらいである。療養所居住の如何にかかわらず、時に未知の重病の方から歌集をおくられることもある。そ

うした方々の作は技術の巧拙を越えてこの一筋につながるといふ思いが深くにじんである。私は先輩というような立場でないが、つとめてそうした人々へは心のこもつた感想の語をとどけるように心がけてもいる。

短歌の指導を通じて必ずしも作品第一主義にとらわれぬ社会教育的意義をいつの間にか私もあちらこちらで多少は果たしたことになつたように思うのである。しかし、こういうことを考えるのは自分の仕事に何らかの価値づけをしようとする得手勝手な考えかも知れない。接する人々がただ短歌に上達されることのみ念願すればそれでよいので、その社会的評定などは本当は他人まかせにしておくべきであろう。誌面が誌面なのでいささか勇み足のきらいなしとしないことを文末に記したことになる。

(金沢大学教授・国文学)

## 社会教育会館

中 野 巳之吉

社会教育センターと図書館が併設同居し

て、一元的に運営され

### 1. ね ら い

当館は、中西知事の構想と熱意によつて、3ヶ年の才月と4億1千万円の経費をかけて出来たもので、社会教育の総合施設として全国にも珍しい文化機関です。建築様式も近代的感觉が生かされ、色彩も調和しています。開館当初玄関の階段や、かまきが格調高すぎて入りにくいと批判もあつたが、却つて「これから学習しよう」という意欲と緊張感を入館者に与えたようで、現在の入館盛況から見て成功したようです。さて知事の構想とは

#### (1) 目標

1. 県下の人々に教養を高めて頂く、そのために、健康になつて頂き、健康な科学的な物の見方、考え方をして頂く。
2. 教養を高めて明朗になつて頂く。スケールも大きく、清新になつて、封鎖性、排他性、因循性を排除して頂く。
3. 進取になつて頂く。技術革新時代に即応して学問をし、近代技術を身につけて、幅広く産業・文化・生活に新しい知恵を出して積極性をもつて活動して頂く。

そうしたねらいです。

#### (2) 方法としては

即物主義で、一流のものを見・聞き、読んで教養を高め、郷土の文化、産業、県政に貢献して頂くということです。

#### (3) 組織としては

#### (4) 任務(性格)は

1. 県下社会教育活動の中心になる。
2. 社会教育団体の活動場所となる。
3. 県の社会教育課と共に、市町村の社会教育の指導に当る。
4. 直接市町村を巡回して、移動センター、移動図書館の役割を果たす。
5. 社会教育および図書の資料収集、作成、複写の業務に当る。
6. 市町村図書館の業務指導と読書の普及をはかる。

#### (5) 方針

1. 県教委の社会教育方針に従つてゆく。
2. 役所的にならぬよう奉仕の解放的に運営する。………という次第です。

#### 2. 機構と設備並に運営

社教センター(職員27名)

庶務課、事業課、視聴覚室の二課一室制  
室数 — 教室3、会議室4、大研修室1、  
視聴覚室1、展示ホール2

図書館 (職員27名)

庶務課、資料課、館内奉仕課、館外奉仕課  
の四課制

蔵書約15万冊、成人閲覧室(100人収容)  
学生閲覧室(350人収容)

児童閲覧室(20人収容)

建物、付設設備、備品、建物や各室の開閉  
についての管理を一元的に両方の庶務課で  
行う。

地下食堂（従業員6名、但し外部業者に依  
託）

開館時刻 — 9時から21時まで

休館日 — 国民の祝日（但し成人の日、子  
供の日、老人の日、文化の日な  
どを除く）と毎月末日、年末年  
始

暖房 — 12月より3月中旬

冷房 — 7月8月の2ヶ月

センターの室使用料

使 用 料 金

階 別	使用対象施設		使 用 料 金			
	室 名	定員	午前 9～12	午後 1～4	夜間 5～8	全日 9～20
2	第一会議室	72	800円	1,400円	2,000円	4,200円
2	第二会議室	24	400	500	700	1,600
2	第三会議室	24	400	500	700	1,600
4	第四会議室	48	600	1,000	1,200	2,800
4	大研修室	460	3,600	5,900	8,300	17,800

注 冷暖房中の使用料金は30%増

但し、使用団体の性格、行事の内容により  
料金の減免があります。

警備清掃 — 外部公社に依託

（依託料年額258万円）

となっています。

### 3. 主体的事業

#### (1) 講座開設

一般文化講座

婦人県政教室

郷土文化講座

婦人講座（教養講座、生活講座）

実務講座

公民館職員研修講座

#### (2) 視聴覚教育

視聴覚教材の研究と利用

定例映写会開催

視聴覚教材の貸出し

#### (3) 展示会開催

美術工芸のもの

考古学上のもの

写真など

#### (4) 青少年育成

談話室運営

グループ・サークルの育成

映画教室運営

#### (5) 教育その他種々の相談部開設

毎週土曜行っています。

#### (6) 社会教育団体への協力

各団体事務室の設置

各団体行事への協力

#### (7) 地方巡回指導

1. 講演、映画、読書、研究を通じて

2. 図書の貸出、移動図書館による配  
本、読書会の指導

#### (8) 図書、資料の収集

#### (9) 図書閲覧室の運営

#### (10) 地方図書館、学校図書館の指導

今のところ以上のような内容です。

#### 4. 開館半年の実績と反省

(1) 講座は何れも受講者は予定人員より多く、

内容もよかつたと見えて好評です。

既に終わった分は次のとおりです。

第1期婦人教養講座（日本女性史）

回	テ　　マ	講　　師
1	大和の <sup>いつらめ</sup> 郎女	梶井 幸代
2	宮廷の才女	川口 久雄
3	源平の女性	下出 横世
4	武家の妻女	服藤 弘司
5	江戸の遊女	若林喜三郎
6	目ざめる女性	鈴木 紀子
7	戦中の女性	福田 茂夫
8	進出する女性	川島 利子
9	出かせぎ母親 と教育ママ	福島 好江
10	（座談会） これからの女性像	中野巳之吉

第1期 一般文化講座

回	テ　　マ	講　　師
1	とうちやんつ子 かあちゃんつ子	作田 せつ
2	法廷よもやまし 話	盛一銀二郎
3	加賀の刀匠	上埜 嘉兵衛
4	映画・テレビ をどう見るか	野川日出雄
5	美術史夜話	秋山 光夫
6	活字文化と 電波文化	牧原喜三郎
7	歌は世につれ 世は歌につれ	高井健太郎
8	やさしい税法	園部 賢治
9	やきものの美	北出塔次郎
10	現代短歌の 味わい方	藤田 福夫

尚、継続実施中のものは

第2期婦人教養講座（文学の中の女性）

（別表1参照）

郷土文化講座（別表2参照）

第1期婦人生活講座（別表3参照）

婦人県政教室（県庁の総務課が担当）

実務講座（速記・書道・孔版・法学・

英語・服装・洋裁・法文など）

など

表 一

回	テ　　マ	講　　師
1	好色五人女(井原西鶴) のおさん	密田 良二
2	「風と共に去りぬ」の スカーレットとメラニー	斉藤 伸子
3	「伊勢物語」の 女性群	大津 有一
4	「二十四の瞳」の 大石先生	前田 慶穂
5	「ある落日」の 三名部清子	森井 道男
6	「ウィルヘルム・マイスター」 のテレビとナターリエ	伊藤 武雄
7	古事記の女性群	西村 通男
8	「とわすがたり(日記)」 の二条	森野 宗明
9	「奇妙な幕間狂言」 のニーナ	福田 尚造
10	「かげろうの日記遺文」 の時姫・紫苑・河野	新保千代子



表 二

回	テ ー マ	講 師
1	ふるさとのあけぼの (埋蔵文化財は語る①)	高堀 勝喜
2	ふるさとのあけぼの (埋蔵文化財は語る②)	橋本 澄男
3	能登のくに加賀のくに	吉岡 康暢
4	郷土「平家物語」	森 栄松
5	名 刹 と 戦 乱	浅香 年木
6	百 姓 も ち の 国	辰見 明
7	七尾城ものがたり	浜岡賢太郎
8	百万石の藩政	清水 隆久
9	一撥とうちこわし	川 良雄
10	幕 末 秘 史	若林喜三郎

表 三

回	課 題	方 法
1	化学繊維について	講義と話し合い
2	繊維と洗剤について	講義と話し合い
3	既製品と注文品	体験をいかして
4	流行は誰が造るの でしょう	みんなで話し合 い
5	これからの衣生活	講義と話し合い
6	市販される加工食 品	現物に基づいて 話し合い
7	冷凍食品のできる まで	見学と話し合い
8	消費者物価はなぜ 高くなる	見学と話し合い
9	じょうずな買い物	専門メンバーと の話し合い
10	やりくりじょうず お母さん	講義と話し合い

(2) 視聴覚の方は今年は、予算約400万円で、新しいフィルムを購入し、館内で映写もし、貸出しもしています。

(3) 展示会は、写真展1回したきりですが、7月から本格的に実施の予定で、その案は次のとおり。

月 区分	10	11	12	1	2	3
展示ケース の 利 用	目で見る郷土 のあけぼの展 (埋蔵文化財)	郷土の伝統 (陶 器)	目で見る郷土 のあけぼの展 (埋蔵文化財)	郷土の伝統 (漆 器)	目で見る郷土 のあけぼの展 (埋蔵文化財)	ひなまつり展
展示棚利用	県有工芸展	工芸展(1) (染 色)	色 紙 展 (文芸作家)	工 芸 展 (木工・竹工・ 金工)	日本画展	
展示板利用	教育文化週間 記念展 (県工芸高校 デザイン展)	読書週間記念 展 (児童生徒読書 ポスター展)	洋 画 展	書 道 展	県 政 展	高文連秀作展 (絵画・書・写真)

(4) 青少年談話室は

坐席 4 0. カラーテレビ、ステレオ、  
新聞、雑誌を備えつけ  
昼は一般に解放、夜は勤労青少年の利用  
ということにしています。  
毎週木曜夜 6 時からミーティング開催。  
グループリーダーの講習も開催していま  
す。

(5) 教育相談部も、専門委員 4 人委嘱して、  
9 月から開始しています。

まだ利用率はわかりませんが、利用度に  
よつてはよろず相談にまで発展させるつも  
りです。

(6) 交通事故相談室(毎月 1 日、1 5 日開設)  
県庁 総務課担当です  
以上の事について参考までに 7 月 1 ケ月の  
利用実績を表で示すと次のようです。

番	事業名	実施日	月回数	延利用数
1	婦人教養講座	毎水曜	3 回	259 人
2	婦人生活講座	隔金曜	3	260
3	文化講座	毎月曜	4	257
4	婦人県政教室	随時	12	646
5	実務講座	毎日曜	7	190
6	青少年グループリーダー教室	毎日曜	2	57
7	郷土文化講座	毎金曜	2	201
8	青少年談話室木曜ミーティング	毎木曜	4	90
9	青少年映画教室	毎土、日、月曜	12	個人 1,293 人 団体 3 件 246 人
10	視聴覚室関係	フィルム貸出件数 鑑賞室利用 録音教材利用	93 件 19 件 10 件	293 本 577 人 34 人

この他、他団体が 7 月中センターを利用された件数は約 100 件入館者 4,500 人、図書館  
の方は 2,536 人、一日平均 975 人、それに閲覧室が満員で、センターの教室  
に入つて頂いた数は一日平均約 200 人、談話室、展示場利用者は一日平均 150  
人と見ています。

(7) 社会教育団体への協力

青年団、公民館、PTA、新生活、ユース  
ホステル等の事務所は 2 階にあり、会議  
やその他集会も当館を利用して実施してい  
ます。

(8) 図書閲覧室は、7 月 8 月は毎日満員で、  
教室、会議室であいている時は解放しまし

た。

(9) 地方巡回

センターの方は目下研究立案中ですが、  
図書館の方は年 6 回の予定で、市町村配本  
所 70 ケ所を巡り本年は既に 3 回実施済み  
です。

○反省

以上運営して見ると、年間経常費約5千万円かかる。収入は100万円程度だから大型高校一校分と同じ額を県が投資する勘定だが、果してそれに値する教育効果をあげてくれるだろうか。責任者として少々心配です。

受付もなく、子供でも誰でも自由に出入り出来る文化の香高い本会館は、入館者数および入館者の気分から言うと、一応は成功しています。しかし、そこを悪用する者も可なり多く、管理は並大抵でない。不特定多数の相手だ。教育の場というが教権もなければ罰則もない。入る人すべて教養を求める人という前提だが、事実はこの社会学校には退学処分 に値する行為も非常に多いです。例えば

1. 公徳傘が27本設置されたが2ヶ月の中に1本になつてしまった。
2. 廊下を喰えタバコで歩く。時には廊下でその吸がらを捨てていく。
3. 冷房であるのに戸を開け放して帰る。閉めても直ぐまた開け放す。
4. あちこちにチウインガム、キャラメル箱紙屑をすてる。
5. 下駄、スリッパは盗まれる。
6. 「図書館にいた」と母をだまして館名を悪用して夜遊びする高校生が非常に多い。この母から「心配で」とよく電話がかかる。探してもいない。この方の忙しさ。全く閉口だ。もし探さねば不親切だとどなられる。

こうした迷惑を並べるときりがない。石川県公徳心、文化も、もう10年もしたらこの建物と同程度になるだろうか。こんな不安がつと浮ぶ。この方の指導役割が大変

です。

ともあれ、利用者と共に歩むべき性格をもっているのも、運営審議会の意見やモニター代りの投書箱の意見なども参考に進めようと思つています。

## 5. 今 後 の 課 題

この半ケ年間に運営してみて、運営面からも指導面からも、機構を再編成し、社会教育本来の姿にすべきだと思つています。

尙、新しい事業としては、移動センターを近く開始するが、これが本館の運営と同じウェートですべきだと考えているので、加賀班能登班とにして、大いに活潑にやりたいと考えています。

また

### (1) 機構については

センター、図書館の一元化を、組織の面からも人の面からも更に深めたい。

### (2) 事業内容について、特に講座に関し、2ケ年計画を立ててみました。

次の案です。

### 婦 人 教 養 講 座 (案)

年度	期	テ　　マ
昭 41	1	日　本　の　女　性　史
	2	文学作品の中の女性像
	3	くらしのなかの科学
42	1	くらしのなかの経済学
	2	楽　し　い　く　ら　し
	3	郷　土　の　女　性

婦 人 生 活 講 座 (案)

年度	期	テ　　－　　マ
昭 41	1	織 維、食 品、消 費 経 済
	2	婦 人 の 健 康、仕 事
42	1	育 児、家 庭 教 育
	2	服 飾、調 度、家 庭 生 活 の 知 恵

文 化 講 座 (案)

年度	期	テ　　－　　マ
昭 41	1	家 庭、社 会、歴 史、芸 術
	2	法 律、衛 生、科 学
42	1	世 界 と 時 局、福 祉、趣 味
	2	建 築、技 術、生 活

郷 土 講 座 (案)

年度	期	テ　　－　　マ
昭 41	1	郷 土 の 歴 史（古 代－近 代）
	2	郷 土 の 自 然、民 俗
42	1	郷 土 の 文 化、芸 能、人 物
	2	郷 土 の 明 治 百 年 史
	3	郷 土 の 自 然 と 産 業

この他、科学技術講座、外国語講座、健康講座、モデル青年学級など設けたい。また巾広く、各種の催しもしたいと考えています。

例えば音楽会、講演会、討論会、郷土名人芸能会など

又視聴覚についてはフィルムの県庁内の集中管理にあたつたとも考えています。

更に読書の普及についても、地区に拠点の小グループの読書会をつくり協力していくつもりです。

(3) 施設設備について

教室、会議室の区別を撤廃して解放的にし自動車、自転車の置場設定も急務です。

尚、これだけ利用者が多くなると、児童図書館、児童向き映画の存廃を研究せねばならぬし、教育対象も在学者と一般社会人との区別もしていかねばならぬようになりそうです。

(4) 職員組織については

本機関は教育の場であり、半ばサービス機関だから、単なる建物の管理者や官庁的感覚者では運営困難です。従つて県下の指導的役割をはたせる人々および奉仕的な円満な性格の人によつて組織さるべきだと考えています。

( 石川県社会教育会館々長 )

## 金沢市の青年学級の現状と問題点

吉 川 実

### 1. 現在までのあゆみ

金沢市における青年学級は、昭和25年ころから地区公民館や公民館のないところでは地区公民教育委員会が主催して青年層を対象に実施していた民主主義講座や、青年達が自主的に地域課題の解明をめざしてグループで研究活動を行なっていた青産研活動がその前身と考えられます。そして青年学級としての

形態をもつたのが昭和27年度からです。

この様な動きのなかで昭和28年青年学級振興法が制定され、翌29年には金沢市青年学級規則が設けられて全市的に青年学級が開設されました。

当時の学級は学級数こそ現在ほどありませんが1学級あたりの学級生数や学習時間は比較にならぬほど多いわけです。(別表1参照)

### <別表 1>

### 学 級 数 等 の 推 移

年 度	学 級 数	学 級 生 数		1学級平均 学習時間数	経 費	
		総 数	1学級平均		総 額	1学級平均
27	28	2,475	89	200	2,284,300	60,100
28	30	2,711	90	250	2,147,700	61,300
29	40	3,119	78	382	2,476,000	57,500
30	42	3,152	75	283	2,031,000	47,200
31	43	3,250	72	298	1,849,498	43,000
32	47	3,711	79	346	2,177,000	46,300
33	47	3,656	78	373	2,364,850	50,313
34	47	3,530	75	326	2,240,500	47,690
35	47	2,997	64	420	2,305,300	49,049
36	46	2,498	54	360	2,482,000	53,956
37	57	3,000	52	232	2,997,678	52,590
38	61	2,760	45	283	4,125,700	67,634
39	52	2,497	48	306	4,535,400	87,219
40	52	2,174	42	251	6,040,092	116,155
41	51	2,086	41	174	5,832,000	114,314

その後、青年達の学習意欲と法律に基づいた行政面での条件整備で経費や講師、教具などが整備充実され、青年学級数、学級生数とも年々増加して、昭和32年から33年度にかけて最高を示しております。

しかし昭和35年頃から、高校進学率の増加や、農村青年の都市流出、あるいは青年をとりまく生活環境の多様化などにより、学級生が年々減少し、地域を主体としてきた青年学級は大きな転換期を迎えたわけです。

そうして反面工場や商店などの中小企業に働く青少年に対する職業教育の重要性が強調されてきました。

この様な状況に対処して市教育委員会では、昭和36年度はじめて市内の商店に勤務する青年達を対象に商店街連盟の協力を得て中央商業青年学級を、また職場青年学級として東陽織物青年学級を開設しました。

そして更に昭和37年度には、理容、洋服、商工、印刷、津田駒工業等の職場、職域学級を増設し、翌38年度には入級希望者の多くなつた中央商業青年学級を2学級とし、39年度には他県や他の市町村から金沢に就職している青少年を対象に中央普通青年学級を2学級、犀川方面と浅野川方面の2箇所を開設するとともに、建具関係に働く人達を対象とした建具青年学級も開設しました。

さらに40年度には、北安江町住吉会館で同地帯の会社工場等に勤務する青少年を対象に工業技術習得を中心とした工業青年学級と職場学級として新名工業青年学級を新設しております。

したがって市教委が職権で開設する中央学級は4学級となり、職場、職域学級は5学級を数え大型学級増加の様子がみえております。

## 2. 現状と問題点

働く青少年の学習の場として、また義務教育修了者に対する後期中等教育の場としても大きな役割を果たしてきた青年学級も、社会の急激な変化にともなつて大きな転換期を迎えているわけでありましたが、その大きな原因の一つとして高校進学率の向上があげられます。すなわち昭和33年度59.7%であつたものが、35年度73%となり39年度80.9%、40年度には中学卒業者5,753人中、就職者はわずか576人となつております。

このため近年高校卒者の入級が次第に増加しており、地区学級の中にはほとんどが高卒者であるということが現れてきており、このことはこれまでの青年学級がもつていた後期中等教育の機能を失なうことでもありますし、また学習カリキュラムの編成がますます困難になつてきたともいえるわけです。

一方農村地域においては、ほとんどの青年達が会社や工場に勤め、在村通勤のかたちをとり、彼らは勤務先の関係で休日はまちまちであり、また帰宅時間もおそいということで定期的な学習活動への参加は困難となり、事実上、青年学級の運営が暗礁に乗りあげているところがあります。

この様な事態は本市における青年学級の形態を大きく変えることになり、職場、職域学級でも基礎のできたところは企業の独自開設とし中央学級も整理して商業青年学級は1学級とするなど新しい大型学級の開設に努めるとともに十数年の歴史をもつ地区学級についても、数年前から内容の充実した国庫補助対象学級の増加を図つてその育成を図るとともに公費の増額、担当主事の研修、教具教材の整備充実に力をそそいでおりますが、一地区

# 金沢市の青年学級の現状と問題点

吉 川 実

## 1. 現在までのあゆみ

金沢市における青年学級は、昭和25年ころから地区公民館や公民館のないところでは地区公民教育委員会が主催して青年層を対象に実施していた民主主義講座や、青年達が自主的に地域課題の解明をめざしてグループで研究活動を行なっていた青産研活動がその前身と考えられます。そして青年学級としての

形態をもつたのが昭和27年度からです。

この様な動きのなかで昭和28年青年学級振興法が制定され、翌29年には金沢市青年学級規則が設けられて全市的に青年学級が開設されました。

当時の学級は学級数こそ現在ほどありませんが1学級あたりの学級生数や学習時間は比較にならぬほど多いわけです。(別表1参照)

## <別表 1>

## 学 級 数 等 の 推 移

年 度	学 級 数	学 級 生 数		1学級平均 学習時間数	経 費	
		総 数	1学級平均		総 額	1学級平均
27	28	2,475	89	200	2,284,300	60,100
28	30	2,711	90	250	2,147,700	61,300
29	40	3,119	78	382	2,476,000	57,500
30	42	3,152	75	283	2,031,000	47,200
31	43	3,250	72	298	1,849,498	43,000
32	47	3,711	79	346	2,177,000	46,300
33	47	3,656	78	373	2,364,850	50,313
34	47	3,530	75	326	2,240,500	47,690
35	47	2,997	64	420	2,305,300	49,049
36	46	2,498	54	360	2,482,000	53,956
37	57	3,000	52	232	2,997,678	52,590
38	61	2,760	45	283	4,125,700	67,634
39	52	2,497	48	306	4,535,400	87,219
40	52	2,174	42	251	6,040,092	116,155
41	51	2,086	41	174	5,832,000	114,314

その後、青年達の学習意欲と法律に基づいた行政面での条件整備で経費や講師、教具などが整備充実され、青年学級数、学級生数とも年々増加して、昭和32年から33年度にかけて最高を示しております。

しかし昭和35年頃から、高校進学率の増加や、農村青年の都市流出、あるいは青年をとりまく生活環境の多様化などにより、学級生が年々減少し、地域を主体としてきた青年学級は大きな転換期を迎えたわけです。

そうして反面工場や商店などの中小企業に働く青少年に対する職業教育の重要性が強調されてきました。

この様な状況に対処して市教育委員会では、昭和36年度はじめて市内の商店に勤務する青年達を対象に商店街連盟の協力を得て中央商業青年学級を、また職場青年学級として東陽織物青年学級を開設しました。

そして更に昭和37年度には、理容、洋服、商工、印刷、津田駒工業等の職場、職域学級を増設し、翌38年度には入級希望者の多くなつた中央商業青年学級を2学級とし、39年度には他県や他の市町村から金沢に就職している青少年を対象に中央普通青年学級を2学級、犀川方面と浅野川方面の2箇所開設するとともに、建具関係に働く人達を対象とした建具青年学級も開設しました。

さらに40年度には、北安江町住吉会館で同地帯の会社工場等に勤務する青少年を対象に工業技術習得を中心とした工業青年学級と職場学級として新名工業青年学級を新設しております。

したがって市教委が職権で開設する中央学級は4学級となり、職場、職域学級は5学級を教えた大型学級増加の様子がみえております。

## 2. 現状と問題点

働く青少年の学習の場として、また義務教育修了者に対する後期中等教育の場としても大きな役割を果たしてきた青年学級も、社会の急激な変化にともなつて大きな転換期を迎えているわけではありますが、その大きな原因の一つとして高校進学率の向上があげられます。すなわち昭和33年度59.7%であつたものが、35年度73%となり39年度80.9%、40年度には中学卒業者5,753人中、就職者はわずか576人となつております。

このため近年高校卒者の入級が次第に増加しており、地区学級の中にはほとんどが高卒者であるというところが現れてきており、このことはこれまでの青年学級がもつていた後期中等教育の機能を失なうことでもありますし、また学習カリキュラムの編成がますます困難になつてきたともいえるわけです。

一方農村地域においては、ほとんどの青年達が会社や工場に勤め、在村通勤のかたちをとり、彼らは勤務先の関係で休日はまちまちであり、また帰宅時間もおそいということで定期的な学習活動への参加は困難となり、事実上、青年学級の運営が暗礁に乗りあげているところがあります。

この様な事態は本市における青年学級の形態を大きく変えることになり、職場、職域学級でも基礎のできたところは企業の独自開設とし中央学級も整理して商業青年学級は1学級とするなど新しい大型学級の開設に努めるとともに十数年の歴史をもつ地区学級についても、数年前から内容の充実した国庫補助対象学級の増加を図つてその育成を図るとともに公費の増額、担当主事の研修、教具教材の整備充実に力をそそいでおりますが、一地区



<別表 2>

昭和41年度 金沢市青年学級開設状況一覧表

番号	学級名	開設場所	学級生数			時間数				職員数				予算(才入)千円				
			男	女	計	職業	家事	一般	合計	主事	講師	補佐	合計	国費	県費	市費	その他	合計
1	中央商業	長町小学校	55	24	79	170	10	80	260	1	7	—	8	50	—	141	—	191
2	第1中央普通	石引町公民館	58	27	85	20	20	210	250	1	8	—	9	50	—	146	—	196
3	第2中央普通	瓢箪町小学校	60	20	80	20	20	210	250	1	8	—	9	50	—	210	—	260
4	工業	住吉工業会館	76	25	101	150	40	80	270	1	8	—	9	50	30	134	—	214
5	理容	理容学校	32	8	40	108	26	124	258	1	8	3	12	30	30	63	—	120
6	建具	弥生公民館	40	—	40	194	—	67	261	1	7	3	11	30	—	60	—	90
7	新名工業	スターデーホーム	7	29	36	60	192	48	300	1	6	—	7	30	—	60	1,060	1,150
8	石川繊維工業	会社内	—	124	124	50	150	120	320	1	8	3	12	30	—	60	1,050	1,140
9	九文絨織工業	〃	—	52	52	—	240	60	300	1	3	4	8	30	—	60	250	340
10	あすなろ	中央公民館	37	24	61	50	50	150	250	1	8	3	12	30	30	60	—	120
11	城南	公民館	18	15	33	160	70	125	355	1	8	—	9	30	—	60	—	90
12	新堅	〃	44	25	69	24	12	268	304	1	8	8	17	30	—	60	—	90
13	菊川町	〃	12	8	20	—	20	100	120	1	3	—	4	—	—	20	10	30
14	材木町	〃	28	6	34	38	34	216	288	1	3	1	5	30	—	60	10	100
15	味噌蔵町	小学校	13	9	22	6	10	34	50	1	7	—	8	—	—	20	10	30
16	長町	公民館	15	3	18	—	—	50	50	1	3	—	4	—	—	20	20	40
17	長田町	〃	20	10	30	20	10	36	66	1	5	2	8	—	—	20	76	96
18	瓢箪町	〃	25	9	34	20	20	210	250	1	4	—	5	30	—	60	—	90
19	馬場	〃	20	13	33	50	20	180	250	1	8	3	12	30	—	60	—	90
20	浅野町	小学校	20	12	32	50	40	162	252	1	6	3	10	30	—	60	—	90
21	森山町	公民館	15	5	20	—	60	120	180	1	3	—	4	—	—	20	—	20
22	千坂	小学校	20	15	35	—	4	50	54	1	8	—	9	—	—	20	15	35
23	夕日寺	〃	10	10	20	12	12	54	78	1	3	—	4	—	—	20	10	30
24	諸江町	公民館	28	8	36	10	10	100	120	1	3	—	4	—	—	20	10	30
25	富盛	〃	30	13	43	60	40	200	300	1	5	1	7	—	—	20	20	40
26	米丸	〃	12	4	16	8	20	36	64	1	3	1	5	—	—	20	20	40
27	三馬	〃	31	11	42	30	30	40	100	1	4	—	5	—	—	20	10	30
28	小坂	小学校	11	9	20	40	40	120	200	1	6	2	9	—	—	20	30	50
29	綾月	公民館	12	33	45	—	100	150	250	1	8	2	11	30	—	60	—	90
30	潟津	〃	22	21	43	15	12	73	100	1	5	3	9	—	—	20	20	40
31	粟崎	小学校	39	19	58	50	50	150	250	1	8	3	12	30	—	60	—	90
32	大野町	公民館	25	15	40	50	50	150	250	1	4	1	6	30	—	60	—	90
33	戸板	〃	31	5	36	30	20	200	250	1	7	3	11	30	—	60	—	90
34	大徳	〃	15	8	23	10	—	60	70	1	3	1	5	—	—	20	20	40
35	二塚	〃	30	20	50	50	30	70	150	1	3	2	6	—	—	20	—	20
36	大浦	小学校	—	35	35	—	20	40	60	1	3	3	7	—	—	20	20	40
37	安原	公民館	30	20	50	20	10	60	90	1	1	2	4	—	—	20	10	30
38	額	〃	21	15	36	—	20	80	100	1	3	3	7	—	—	20	30	50
39	犀川	小学校	16	15	31	30	40	180	250	1	5	3	9	30	—	60	—	90
40	押野	公民館	20	7	27	10	16	70	96	1	3	2	6	—	—	20	10	30
41	東浅川	小学校	21	7	28	50	50	150	250	1	3	3	7	—	—	20	60	80
42	田上	〃	15	15	30	15	15	25	55	1	4	—	5	—	—	20	—	20
43	医王山	〃	23	11	34	48	24	216	288	1	3	2	6	—	—	20	—	20
44	俵	〃	25	5	30	40	40	40	120	1	4	2	7	—	—	20	10	30
45	南森本	公民館	10	10	20	20	25	40	85	1	4	—	5	—	—	20	—	20
46	八田分	館	19	18	37	20	10	33	63	1	3	—	4	—	—	20	—	20
47	才田	〃	18	10	28	23	20	55	98	1	5	—	6	—	—	20	—	20
48	朝日	小学校	23	—	23	20	10	40	70	1	3	—	4	—	—	20	—	20
49	牧山	〃	17	11	28	40	26	32	98	1	6	—	7	—	—	20	—	20
50	花園分	館	25	20	45	68	30	20	118	1	8	3	12	—	—	20	—	20
51	不動寺	〃	32	22	54	25	17	29	71	1	5	—	6	—	—	20	—	20
	合計		1,226	860	2,086	1,984	1,835	5,213	9,032	51	262	75	388	710	90	2,251	2,781	5,832

内の対象青年では学級生数が不足し、また専用教室の不足、専任講師の不足からその数も限度に達した感じであります。（別表2参照）

したがって大型学級は広域対象のものが増加し、職場、職域の学級が増設されれば、一番その影響を受けるのは地区単位の公費（市費のみ）2万円前級で国庫補助対象にもならず、反面運営は学級形態をとるのでいろいろな面で負担が多く開設返上の地区が増加しつつあるので昭和42年度はこれらの学級は別途な形態、例えば（青年教室）といったものとし人員も15名以上ならばよく、学習時間も50時間を期間は2カ月から1カ年内に実施すればよいという方法を考えております。

ただ地域学級の場合問題はこれだけでなく地域青年団との関係があげられ、国庫補助額が現在の様に少額では根本的な解決は困難と思われるますし、後期中等教育と職業教育の問題は別途に考えてゆかねばならぬのではないかと思います。

最後にこれは青年学級だけでなく社会教育全般にいえることですが、利用できる施設の不足と不便さ更に専任講師の不足があると思います、これに対しては国や地方公共団体の行政的な措置が必要であり、我々当事者も含め関係者が真剣に考えねばならぬ問題だと思います。

<別表 3>

昭和41年度青年学級開設内訳

		学 級 名	公 費		学 級 生	
			総 額	1学級当り	総 数	1学級当り
中 央 学 級		中央商業 第1,第2中央普通 工業の4学級	861	215	345 (96)	86
職場 職域学級		理容、建具 石川繊維、新名工業、丸文繊維 の5学級	480	96	292 (213)	52
地 区 学 級	国庫補助 対象学級	城南、新堅町、材木町、瓢箪町 馬場、浅野町、鞍月、栗ヶ崎 大野町、戸板、犀川、あすなろ の12学級	1,110	93	506 (191)	42
	そ の 他	菊川町、味噌蔵町、長町、長田町 森山町、千坂、夕日寺、諸江町、 富樫、米丸、三馬、小坂、潟津、 大徳、二塚、大浦、安原、額、 押野、東浅川、田上、医王山、俵 南森本、八田、才田、朝日、牧山 花園、不動寺、の30学級	600	20	943 (360)	31
計		51 学級	3,051	59	2,086 (860)	40

( )内数は女子

(金沢市教委社会教育課・社会教育主事)

## 研究生として入室して5年

米 田 民 男

### 1) 入室まで

農業高校卒業と同時に、父のやつている農業に従事した自分。平凡な農民として一生を過すのが自分のコースであつたかもしれない。

このような大地に無数に生えている1本の雑草のような自分が、思つてもみたことのなかつた大学の研究室に、研究生として入室して早くも5年間になる。

農業高校卒業時には、将来水田+蔬菜で立派な農業経営を確立しようと夢見ていた。しかしいざ農村に入つて毎日の農作業に励げんで見ると現実はその生やさしいものではなかつた。地域の青年団にも入つた。よく青年団活動に出るようになり、演劇や読書（語り合いを主とする）もやつた。特に読書の世話もやり、同年配の4人の仲間ができた、小学校からの同級生であり、そんな中で「結婚は見合か、恋愛か」とか農家の後継ぎである関係から「農休日の問題」など話し合い、部落で月に1回ないし2回を農休日とし、朝8時から夕方6時まで田圃へ出てはならない、出た場合には罰金をとるといふ、罰金休日まで作つたりした。また35年度の安保斗争のときには、安全保障条約の学習をやつたりしたが、36年度になり、役員選出をめぐつて自分達4人の仲間がばらばらに喧嘩別れのような状態になつてしまつた。その時自分達仲間がいかにか、表面的なつき合いしかしていなかつたかを思いしらされ、自分がやつてきたことについて疑問を持たざるえなくなつた。そして

青年団活動にも自信がなくなつた。しかも校下青年団長の役をやらなければならなくなり、一時はやめて家にとじこもつてしまおうかとさえ思つた。しかしそこで自分なりに考えた。やめてしまえば自分が現実から逃避することになる、ここで皆のために青年団活動の本当のあり方を求めようと思ひつた。そして本を読んだり、研修会等にかかざらず参加したりした。その年松任町連合青年団で、横川欣三君（彼も研究生の一人である）といろいろと話し合つた。よく言い合つたことに、「青年団と青年学級をいかにして両立させるか」とか「農村において、仕事と家庭とをはつきりと区別する」とか、このような問題を話し合つた。しかし実際に自分の地域にかへつてやろうとしても実現不可能なことが多いし、困難な条件が多く横たわつており、その上少しでも住みよい所を作らなければという気持ちを持つた人も案外に少ない。そこでせめて青年団活動を通じて掘りおこそうと努力した。農村問題をとりあつた芝居をやつたりもした（現在も続けている）。しかし劇と現実の生活を結びつけることは難しく、ここでも劇は劇としてうけとめるに終つた。その上青年団活動においても、これまでのようにお互いに本音をぶつける事が少くなり、一時期を団体活動によつて逃避しているような状態になり、自分も自信を失ひ他の人も信じられなくなつてしまつた。そんな時に、当時公民館主事だつた若島俊則氏（現松任町教育委員

会事務局勤務)に誘われて、金大の社会教育研究室の講座に1.2度参加した。

その頃、社会教育研究室があることも知った、講座によつてそれまでのもやもやとした問題が整理された。その時から来年は研究生になれたらなり、農村に数多くある問題をみきわめ、そして自分自身自信を持ちたいと思つた。そして37年度、金沢大学の社会教育研究室に入室させていただき、農村問題研究会と社会思想研究会に所属した。農村問題研究会(以後研究会とする)に参加し、最初に感じたことは、それまで青年団等の講演会の講師になられる先生方の顔が見え、自分が研究会に入る資格があるのかな?と思つた。しかし先生方が気軽に自分らと何のへだたりもなく話し合いをしているのを見て自分も“やろう。”と思うようになり、それからは参加することにきめた。

## 2)入室して

第3回農村文化研究集会の時、石井先生が、一人の農民として考えなければならない問題として「土地をどうみるか」という問題を出された。そして土地を財産としてみる見方から生産手段としてみる見方に意識をかえねばならないということばは、それまで土地を財産としか考えていなかった、無意識に親からうけつく財産としかみていなかった、自分にはきわめて新鮮なものとしてひびいてきた。このことは農村に住んでいる者が現在でもほとんど疑問に思っていないことだし、農村における指導的な立場の人達で口では、「企業的な農業経営を考えてゆかねばならない」、と云っている人でも本音というよりはやはり財産としてしかみていないのではないだろうか。

考えてみると今の若い人たちが後継者となる場合重荷になるのは、「親から、いや先祖からの土地を減らしたりすれば、地域の人達は何と云うだろう」という心配である、我々が現代的な農業を求めようとすればするほどこれが重荷になる。そこに職業としての農業よりも宿命的な旧態依然とした農業を営むよりほかなくなるのである。それまで考えてもみなかつた事「土地は生産手段である」というこのことが、それ以来私の頭にはつきりときざみつけられた。

今までの自分達が考えてきたことは、農業を営むというかぎられた中で考えてきたためにどうしても主観的な見方だけしかできず、土地観、経営観も除々に変つてゆく中にいながら客観的な見方が出来なかつたように思う。しかし今になつて、ここ5年ほどの自分をふりかえつてみると自分もある程度変つたなあとと思う。

研究室での第4回、第5回農村文化研究集会の準備会や「明日への探求」第2集の試みや昭和40年度の年間研究テーマ“農民の生活姿勢の探求”の下での学習に参加するなかで、自分たちの生活姿勢の確立がいかに大切であるかを知つた。そしてその生活姿勢の確立は、農民が何を求めて生きるのか、それを獲得するために農民は何をもたねばならないのか、何をもっているのかをはつきりみきわめて一つ一つつくりあげていくことが大事であることも知つた。こんな学習の中で自分たちが農業を営んでいく場合に、しつかりと数量的につかむことが大切であることはかねがねしつていた。しかし、たとえば米を生産する場合でも、あるいは蔬菜を生産する時でも生産費を調べる時に、今までは、地代、肥料、

## 研究生として入室して5年

米 田 民 男

### 1) 入室まで

農業高校卒業と同時に、父のやつている農業に従事した自分。平凡な農民として一生を過すのが自分のコースであつたかもしれない。

このような大地に無数に生えている1本の雑草のような自分が、思つてもみたことのなかつた大学の研究室に、研究生として入室して早くも5年間になる。

農業高校卒業時には、将来水田+蔬菜で立派な農業経営を確立しようと夢見ていた。しかしいざ農村に入つて毎日の農作業に励げんで見ると現実はその生やさしいものではなかつた。地域の青年団にも入つた。よく青年団活動に出るようになり、演劇や読書（語り合いを主とする）もやつた。特に読書の世話もやり、同年配の4人の仲間ができた、小学校からの同級生であり、そんな中で「結婚は見合か、恋愛か」とか農家の後継ぎである関係から「農休日の問題」など話し合い、部落で月に1回ないし2回を農休日とし、朝8時から夕方6時まで田圃へ出てはならない、出た場合には罰金をとるといふ、罰金休日まで作つたりした。また35年度の安保斗争のときには、安全保障条約の学習をやつたりしたが、36年度になり、役員選出をめぐる自分達4人の仲間がばらばらに喧嘩別れのような状態になつてしまつた。その時自分達仲間がいかにか、表面的なつき合いしかしていなかつたかを思いしらされ、自分がやつてきたことについて疑問を持たざるえなくなつた。そして

青年団活動にも自信がなくなつた。しかも校下青年団長の役をやらなければならなくなり、一時はやめて家にとじこもつてしまおうかとさえ思つた。しかしそこで自分なりに考えた。やめてしまえば自分が現実から逃避することになる、ここで皆のために青年団活動の本当のあり方を求めようと思ひつた。そして本を読んだり、研修会等にかかざらず参加したりした。その年松任町連合青年団で、横川欣三君（彼も研究生の一人である）といひろろと話し合つた。よく言い合つたことに、「青年団と青年学級をいかにして両立させるか」とか「農村において、仕事と家庭とをはつきりと区別する」とか、このような問題を話し合つた。しかし実際に自分の地域にかへつてやろうとしても実現不可能なことが多いし、困難な条件が多く横たわつており、その上少しでも住みよい所を作らなければという気持ちを持つた人も案外に少ない。そこでせめて青年団活動を通じて掘りおこそうと努力した。農村問題をとりあつた芝居をやつたりもした（現在も続けている）。しかし劇と現実の生活を結びつけることは難しく、ここでも劇は劇としてうけとめるに終つた。その上青年団活動においても、これまでのようにお互いに本音をぶつける事が少くなり、一時期を団体活動によつて逃避しているような状態になり、自分も自信を失ひ他の人も信じられなくなつてしまつた。そんな時に、当時公民館主事だつた若島俊則氏（現松任町教育委員

会事務局勤務)に誘われて、金大の社会教育研究室の講座に1.2度参加した。

その頃、社会教育研究室があることも知った、講座によつてそれまでのもやもやとした問題が整理された。その時から来年は研究生になれたらなり、農村に数多くある問題をみきわめ、そして自分自身自信を持ちたいと思つた。そして37年度、金沢大学の社会教育研究室に入室させていただき、農村問題研究会と社会思想研究会に所属した。農村問題研究会(以後研究会とする)に参加し、最初に感じたことは、それまで青年団等の講演会の講師になられる先生方の顔が見え、自分が研究会に入る資格があるのかな?と思つた。しかし先生方が気軽に自分らと何のへだたりもなく話し合いをしているのを見て自分も“やろう。”と思うようになり、それからは参加することにきめた。

## 2)入室して

第3回農村文化研究集会の時、石井先生が、一人の農民として考えなければならない問題として「土地をどうみるか」という問題を出された。そして土地を財産としてみる見方から生産手段としてみる見方に意識をかえねばならないということばは、それまで土地を財産としか考えていなかった。無意識に親からうけつぐ財産としかみていなかった、自分にはきわめて新鮮なものとしてひびいてきた。このことは農村に住んでいる者が現在でもほとんど疑問に思っていないことだし、農村における指導的な立場の人達で口では、「企業的な農業経営を考えてゆかねばならない」、と云っている人でも本音というやはり財産としてしかみていないのではないだろうか。

考えてみると今の若い人たちが後継者となる場合重荷になるのは、「親から、いや先祖からの土地を減らしたりすれば、地域の人達は何と云うだろう」という心配である、我々が現代的な農業を求めようとすればするほどこれが重荷になる。そこに職業としての農業よりも宿命的な旧態依然とした農業を営むよりほかなくなるのである。それまで考えてもみなかつた事「土地は生産手段である」というこのことが、それ以来私の頭にはつきりときざみつけられた。

今までの自分達が考えてきたことは、農業を営むというかぎられた中で考えてきたためにどうしても主観的な見方だけしかできず、土地観、経営観も除々に変つてゆく中にいながら客観的な見方が出来なかつたように思う。しかし今になつて、ここ5年ほどの自分をふりかえつてみると自分もある程度変つたなあ一と思う。

研究室での第4回、第5回農村文化研究集会の準備会や「明日への探求」第2集の試みや昭和40年度の年間研究テーマ“農民の生活姿勢の探求。の下での学習に参加するなかで、自分たちの生活姿勢の確立がいかに大切であるかを知つた。そしてその生活姿勢の確立は、農民が何を求めて生きるのか、それを獲得するために農民は何をもたねばならないのか、何をもっているのかをはつきりみきわめて一つ一つつくりあげていくことが大事であることも知つた。こんな学習の中で自分たちが農業を営んでいく場合に、しつかりと数量的につかむことが大切であることはかねがねしつていた。しかし、たとえば米を生産する場合でも、あるいは蔬菜を生産する時でも生産費を調べる時に、今までは、地代、肥料、

農業、農機具代、労賃という風に計算していたが、~~それ~~の中へ技術費をはつきり見るが必要であると云うことをききそこでも農民も技術に生きる人間だという自信を得ることできた。技術費を計算するということは農業をやろうと云うエネルギーの源になり、そんなことに力づけられて積極的に、農業生産以外の課題にとりくむ意慾も出てきた。

今年で6回目をむかえた「農村文化研究集会」を自分の地域山島で開催できたのも意義深い。山島がはたして地域的に妥当なところであつたかどうか疑問もあるが、研究室の先

生方の好意がうれしくてならない、しかしそういう中で、つくづく思うことは農民（自分も含めて）は本音を言いあえる機会をもっているのだろうか、又他人の意見を素直に聞くことのできるような心をもっているだろうか。いつも先入観で他人をみているところがないだろうか、せめてこの研究会でこのようなカベをぶちやぶりたいと思つている。

これからも農村という生きものを、そしてその中に生きている自分、そして他の人々を見きわめ、みんなで何でもいえるたくましい人間になり農村にしていきたいと思つている。

（農業・山島公民館主事・農村問題研究会所属）

金沢大学社会教育研究室

昭和 4 1 年度 共同研究集会 第 3 回

記 録

昭和 4 1 年度 研究テーマ

現代社会における家庭の問題

——今日の社会に対し家庭は何をなしうるか——

第 3 回 研 究 集 会

- テ　　マ　　　　　社会経済の中の家のモラル
- 期　　　日　　　　　4 1 年 1 0 月　1 日　（土）
- 日　　　程
- 1 ) 戸頃教授より方針説明
  - 2 ) 研究発表　　① 北　村　豊　作
  - ② 木　下　定　子
  - 3 ) 分科会討議　　（男女に分れて）
  - 4 ) 全体討議

- 会　　　場　　　　　金沢大学教育学部会議室
- 担　　　当　　　　　社会思想研究会
- 出　席　者　　　　　3 6　名



## 発 表 要 旨 (1)

北 村 豊 作

第3回共同研究に当りまして、ささやかながら其のきつかけとなるようなことを述べてみたいと思います。お手許にいつているプリントの中、先ず「家庭の中のモラル」のところをご覧下さい。・・・・・・。

ところでテーマは「社会経済の中の家庭のモラル」ですが、これは教育、特に社会教育ということに関連することを終始意識するわけです。そのうえに社会教育と社会思想とを無縁のものとしてではなく、やはり繋がりのあるところを考慮におきたい次第です。両者の紐帯は、正義とか真理の追求ということに見出し得ます。社会思想と申しましても、具体的には幾つもあり、個人の価値とか自主的精神とかをうたっている教育基本法第1条「教育の目的」に通うそれは「理想主義的社会思想」の系譜に属するものであると考えます。そしてその生命は、自律的精神を基調としている人格主義をふまえて「改革すべきを改革する」というところにあります。

改革の主体は人(社会の成員)であります。その人が家庭では、夫とか妻とか子とかいう各人格であり、それとともに、改革に関心する或は関心を要請される主体も、このテーマに関連させ家庭における成員(幼児、少年は微妙ですが)に帰するわけです。

現存の社会経済秩序が何等改革の余地がない理想的な状況であれば、プリントで先程ご覧載しましたような「家庭の中のモラル」における各項目のようなことで、不充分でもありましようがおよそ遠からずと思われます。

併しこのテーマでは、もつと次元を掘りさげ、現存する社会経済への改革的使命に着眼、つまり現存秩序の矛盾を剔抉し且つ克服するという。一は科学的分析、一は倫理的認識によつて導き出される家庭のモラルを追究せねばならないのでないでしょうか。しかもこのことはまた教育の目的の核心、仔細には社会教育ないし家庭のそれに及ぶ意義にも結びつくものと考えられるのです。

ご承知のように社会経済の現存秩序は地域によつて格差があります。今日は共産国、低開発地を除外し、通例の資本主義の地域にしぼります。資本主義のメカニズムは社会運動(自然発生的な性格のものもあるが、此处では教育、真理、正義、理想主義的社会思想に関連する局面が強調せられる)によつて変容しつつあります。(変容に関しては、資本主義内部の作用による局面や、有機的要因による局面に気づいていないわけではない)さてプリントにも記載のように、資本主義変容の具体面は6項目ほど指摘できます。しかるに経済的福祉が多数の無産階級、勤労大衆(家庭単位に還元し得る)に充分霑ておらない社会的事情こそ資本主義固有の本性が主要因をなしつつある現段階なのであり、それは社会経済にまつわる「残存する桎梏」(具体的項目はプリントに記載)にほかならないと云えましよう。それなればこそ改革が必要なのであり、改革のためには、教育機能依存による政治的自覚とか社会連帯意識の昂揚を指摘する所以なのです。

福祉国家 welfare state, Wohlfahrtsstaat 建設、それは民主的理想社会への改革における一つの通り路であり、それらの価値体系は、社会経済における無産大衆への啓蒙の可能性を解く不可欠の認識といえましょう。こうした認識こそ理想主義的改革原理の意義に繋がるのであります。

教育の目的のところで正義や真理の追究（社会教育、家庭教育にもこのことは退けられない）ということを見てきましたが、真理と不可分に認識しようとする社会的正義とは「社会（経済）生活における実質的な平等を要求する理念」であり、このことの強調は必然に「文化伝達の機能」に結びつく筈です。改革原理の社会哲学では「あらゆる社会構成員の人格成長をなし得るような社会が理想の社会」、また同道德哲学は、そのような社会に転回する努力を要請する。改革体系の上部構造は「民主的議会主義、言論自由主義」であります。問題は一連の原理に目をつむるか、良識のもと教育によつてその原理の要請面の昂揚普及に努力するかであります。福祉国家ということに関連し、社会保障一つだけを採用挙げましても、日本は英国よりも半世紀遅

れております。イギリスの水準は、該国は加工工業国として、第二次産業所属者が非常に多いということもありましょうが、水準の進める要因はもとよりそれだけではないでしょう。このことはよく考えてみねばならぬ点であり、それはほかならぬ社会経済の中の人々の自覚とか教育とかの問題に繋がっています。

自覚なく漫然としていてよければ、正義や真理の強調も無用であり、また教育機能の半眠を意味することとなりましょう。而して眠りなき教育では、人々に正義や真理をふまえた改革観念を自覚させる局面を指摘できます。

ところで経済社会の中の人々は、また各家庭に所属する人々でもあります。このときに必要とするモラルとして採りあげたのが、プリントの「動態的推移をふまえる社会経済の中の家庭のモラル」の各項目なのです。主体性への志向、真実追求の態度、社会連帯意識を深めること、政治的無関心を克服、正しく明るい政治への志向参加、家庭の民主化等、私の話のほか私のプリントをよくご覧になれば、家庭のあるべきモラル研究展開への参考にして載ければ幸でございます。

## 発 表 要 旨 (2)

木 下 定 子

私はサラリーマンの主婦です。普通なら子供も手を離れ、主人の給料もいくらかよくなり、心身共に余裕の出る年代なのに、毎日常生活にあくせくして本を読んだり、レヂャーを楽しむことはほとんどありません。

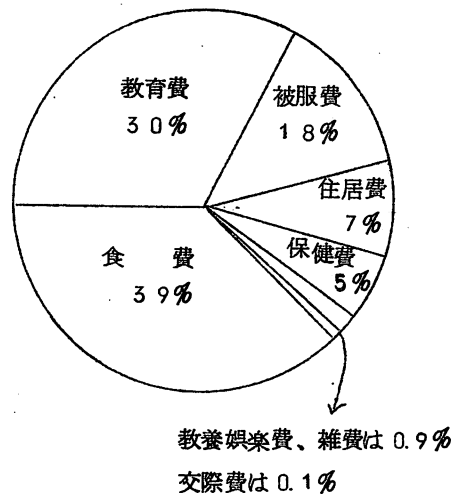
そんな者ですから、今度のテーマを前にして全く途方にくらてしまつたのです。しかし考えてみると、私の日々の暮らしは現在の社会経済の中での家庭生活ですから、それは大なり小なり社会経済のあらゆる面につながっているわけで、ここに我が家の物心両面の赤裸々な姿をさらけ出してみることによつて、課題を探究していただきたいと思ひます。

まず我が家の経歴と家族構成は次の通りです。私共は20年と6カ月前、親子3人半で台湾から私の実家へ引き揚げて来ました。当時の苦しい生活は云うまでもなく、私は赤ん坊をおぶつてかつぎ屋もしました。とにかく13年間、私達5人は宿かり暮らしをしました。が、7年半前、現在の向山の中腹に小家を建てて移りました。勿論、主人の勤め先から借金をしました。ところがこの土地は、其の後二度も涯崩れがあつて、再三治水工事を市へ交渉しましたが、私有の山なので何の手も打つてもらえません。これはとても個人の手に負える仕事ではありませんので全く苦慮しております。サラリーマンが家を建て、その返済金も終らぬ中に追われる形で、主人をはじめ家の者は、家を愛し暮らしを整える意欲から遠い日々を送つています。

こうした中で、長男は金大医学部の3年、

長女は金沢美大の2年、2女は大学予備校に通つていますが、彼等の学生生活も亦社会の様々な影響を受け、それが家庭の一員としての生活にもいくつかの問題を生じています。

次に我が家の家計状況を、今年3月から8月までの平均をパーセントで現してみます。これは私の手取金についてのみで、主人の小遣いはその出張旅費を当てるので含まれていません。



この表で見る様に、食費、教育費が家計の大部分を占め、教養娯楽、交際費が最も少いのです。食費の上昇率は今年に入つて特に大きいのに、質的にはむしろ低下して、1人1日平均216円は必要カロリーの最低に足りません。しかし上の子供2人は、屋を外食するので平均240円になります。

ある団地の勤労者の昨年度の家計報告によ

ると、出費はふえたが食事の内容はかえつて悪くなつて、エンゲル係数は20.9%だが1日の食費は132円で、一番食物にシワヨセが来ている。夫の小遣は30%にもなるが、コーヒ代、タクシー代、本代などの値上りがひびいているので主婦のアルバイトを全部入れても赤字で、ボーナスはこの赤字埋めで消えてしまい、不時の出費は会社から借金すると。これは決して人ごとではありません。

子供が教育ざかりの場合、我が家では両親の娯楽、交際は(うちの場合は特に主婦に於て)皆無に等しく、ちつとマイホームにこもり、それが子供達とのギャップを大きくする原因ともなるのです。しかし子供達にすれば、金のかゝらない苦しい勉強と、乏しい小遣のやりくりで苦勞するわけです。そんな彼等が、現在の社会機構とか、社会経済の有り方に目を向ける結果になるのは当然ではありますが、それが家庭生活と、その秩序に同調出来ない場合も生ずるわけです。

次に表には出ていませんが、借金があつても生命保険に年間9万円も加入しているのは、保障のない生活の不安から来ているので、これは給料から天引きにしています。毎月の天引きが3万円近くにもなるのは、家の返済金や、税金の高いことにもよります。

この様に問題を並べただけでは何の解決にもなりません、まず見きわめ、批判することから出発し、皆様の御指導をお願いしたいと思うのです。

終りに、最近私のアルバイトを通じて感じていることを述べてみます。私は現在5人のカギ子と、教育ママの子を預つていますが、これは私の楽しみとして進んでやつているのです。それというのも、自分の子供が未だ経

済面では全部依存しながら、精神面では独立しつゝあることを認めねばならぬ時期にある親としての、経済の負担と心の空虚を、いくらか埋める方法ともいえるのです。

この子等は現代つ子の姿をまざまざと見せております。経済観念がはつきりしていて、すぐに損得を計算し、又お金で何でも解決しようとする面を持っています。お金に恵まれているので、持ち物やおもちや等高価を競い、外出は車で食堂へといった調子です。不相応な知識や言葉を知っており、独占欲がつよく、大声で時には乱暴です。これは現代の社会経済のひずみから生れたものでなくて何でありましょうか。

ところが、この子等は、私の作つてやるおにぎりを大喜びし、手製のお弁当が大好きなのです。それは母親が忙しいので、インスタント食品で忘れられていく家庭の味への郷愁ではないでしょうか。又一しよに作る廃物利用の素朴な工作に熱中する彼等でもあるのです。土を掘り、種を蒔き、花を育てることの大好きな面も持つております。泥んこになつて川や山をかけ廻るのが、本来の子供の姿であることに変わりはないと信ずるのです。忘れていているものは本来の姿に戻るべく、又失つていないものはもつと大切に育てゝいき度いと、私のさゝやかな努力を惜しまないつもりです。何時の日か彼等の目が社会のほんとうの在り方に向けられることのあるのを念じて。

金沢大学社会教育研究室

昭和41年度共同研究集会第4回

記 録

昭和41年度研究テーマ

現代社会における家庭の問題

— 今日の社会に対し家庭は何をなしうるか —

第4回 研究集会

テーマ 人間形成における家庭の地位と役割

期 日 昭和41年11月 5日(土) 13.30～16.30

- 日 程
1. 13.30～13.45 オリエンテーション
  2. 13.45～14.45 研究報告と討議
  3. 14.45～16.15 パネルディスカッション
  4. 16.15～16.30 総 括

会 場 金沢大学教育学部会議室

担 当 家庭教育研究会

出席者 38名

## 概 況 報 告

神 力 甚 一 郎

今年度の第4回共同研究集会は、家庭教育研究会の担当のもとに、表記の要領で11月上旬に行われた。

まず神力が挨拶を述べた後で、研究室の家庭教育研究会の活動状況を報告し、本研究集会のテーマの趣旨と日程を説明して、オリエンテーションとした。

つぎに、石川県PTA連合会事務局長の篠田先生に特にお願いして、PTA県連が昨年度の家庭教育基礎調査に引きつづいて今年度実施した家庭教育調査の集計のなかから、とくに親子関係に関係したものの調査結果を発表していただき、家庭教育の中心問題と見られる親子関係の諸問題について討論した。

上記の研究報告と討議につづいて、石川県社会教育課の福島先生（梶井先生の代理）の

司会のもとで、丹後忠一、深見やよい、石井幸、上原留意の4名の研究生の体験、意見の発表について、参会者の自由なディスカッションを試みた。

最後に、神力がかんたんに感想を述べて研究集会の総括とした。出席者は約40名で、時間の制約で深くつゝこんだ討論はできなかったが、相当活発な意見交換を見られ、研究集会としてはほぼ所期の成果を収めることができたように思う。

以下に篠田先生の調査報告とパネルディスカッションの概要を掲げて、研究集会の報告に代えるたことにしたい。

# 1. 親子関係の調査

— 子らは訴える。親は反省する。 —

石川県PTA連合会 篠田文仙

石川県PTA連合会は、明るい家庭づくりの研究資料として、昭和40年度に家庭教育基礎調査を行い、

## 1. 居住条件について

- (1) 地域環境
- (2) 住宅条件

## 2. 家族構成について

- (1) 家族構成員
- (2) 家族の人間関係

## 3. 文化生活について

- (1) 道徳生活
- (2) 家庭学習

## 4. 健康安全生活について

調査し、問題点を検討した。しかし家庭が、愛の場、いこいの場、教育の場にふさわしいものであるかをたしかめるために、昭和41年度は、人間関係、特に親子関係がどうなっているか、家庭生活がどのように整えられているかを、更に調査することとし、

### 1. のぞましい性格について

- (1) のぞましい性格についての意見。
- (2) わが子ののぞましい性格のあらわれ。
- (3) わが子ののぞましい性格に程遠いもの。

### 2. 親子の人間関係について

- (1) 父母に対する子どもの不満。
- (2) わが子の教育についての父母の反省、

を調査した。

調査は、県P連専門委員の所属する芦城、小立野、金石、森本、笠間、山王、小木の小

学校7校と、兼六、高岡、笠間、中部、春日の中学校5校に依頼し、小学校は6年、中学校は3年の2学級宛の児童生徒と、抽出法による父母100名宛を対象としたが、調査の資料となつたのは、総計800名余となつて

いる。  
調査の方法は、科学的でないので、専門家からみれば批判の余地があると思うが、私どもとしては、これによつて大体の傾向を知ることができたのである。

のぞましい性格の調査では、道徳生活を高める上から、研究を要するいくつかの問題点をみつけたのであるが、これにはふれないで、ここでは親子の人間関係についての調査結果を報告し、今後のPTA成人教育活動の方向づけに活かしたいと思う。

### ○父母に対する子どもの不満

子どもが父母に理解されず、心からの要求や願いが容れられないことが、子どもの作文によくあらわれる。いつか金大の永守先生が、附属小学校の子どもの作文を読んで、親たちの反省を求められたことがあるが、これは附属の子どもだけがもつ父母に対する不満ではないらしい。このたびの調査は、いくつかの小学校での作文や調査にあらわれた子どもの不満とするところの中から、20項目をえらび、それについて同じように思っているのに○印をつけさせ、示された項目以外で不満に思っていることがあつたら、つけ加えて書くよう

にしたものである。その結果が次の表である。

父 母 に 対 す る 子

<div>子ども ちの不満</div> <div>調査校</div>	1	2	3	4	5	6	7	8	9
	父も母もいそがしすぎる	私とゆつくり 話し合う時間がない	るすをすることが多い	私と一しよに食事をしない	私と一しよにあそびに 出かけてくれない	勉強について 口やかましくいう	父母は私の力では取れそ でない成績をのぞんでい る	おちついて勉強 できるへやがない	勉強について 教えてくれない
芦 城 小	18	17	14	2	27	35	16	18	4
小 立 野 小	24	17	21	1	26	37	12	23	11
金 石 小	36	14	19	4	22	34	16	19	9
森 本 小	26	7	19	6	20	42	13	18	7
笠 間 小	24	23	11	4	28	36	20	27	13
山王小(袖江)	13	3	5	2	12	21	13	13	4
小 木 小	27	23	20	6	43	57	38	28	25
兼 六 中	22	11	9	3	17	33	19	28	6
高 岡 中	14	13	10	7	18	32	14	17	10
笠 間 中	28	14	15	3	24	35	12	17	12
中 部 中	15	5	7	4	16	8	5	5	10
春 日 中	31	23	23	11	28	34	12	22	24
合 計	278	170	173	53	281	404	190	235	135
順 位	5	10	9	18	4	1	8	7	12



子どもの不満 (その1.)

10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	調査人員
参考書やざつしなどを 買ってくれない	相談相手になつてくれない	私の気持や考え方を わかつてくれない	小ごとが多すぎる	子どもに対して 不公平なことがある	私にきびしすぎる	友だちとつき合うことを よろこばない	両親はよくけんかする	父は母に対して むりなことをいう	子どもには口やかましいが 父母の生活はだらしない	進学について 意見があわない	
6	8	18	27	19	18	6	7	6	4	3	83
8	7	28	35	26	13	9	8	15	3	0	89
8	1	29	23	25	14	10	4	4	0	2	88
8	6	19	26	9	19	4	8	7	3	4	71
23	12	21	23	16	17	6	7	2	4	3	68
7	1	17	22	17	7	2	4	6	8	1	48
28	15	33	43	34	28	12	11	13	8	2	82
15	3	27	45	19	5	6	6	6	6	7	89
5	6	31	35	19	8	6	7	4	5	5	82
10	7	33	41	29	9	2	5	0	3	7	74
10	7	13	14	13	5	5	5	2	5	3	30
7	10	33	32	22	11	8	10	5	10	8	80
135	83	302	355	249	154	76	82	70	59	45	884
12	13	3	2	6	11	15	14	16	17	19	

## 子どもの不満 (その2)

1. おこずかいが ほしい
2. おこずかいが 少ない
3. テレビのことで意見があわない
4. 父はよく酒やたばこをのむ
5. ちょつとしたことで、暴力をふるう
6. 母は約束を守らない
7. 勉強について無関心である
8. 母が健康で暇があるのに父が食事の用意をする
9. 宿題が多すぎる
10. 兄弟の区別なしに、仕事や勉強の量を計るので困る
11. 私の興味を理解してほしい
12. よい成績をとつても喜ばない
13. 夜おそくおやつを買ってきて「子どもはねなさい」といつてくれない
14. 父の帰りがおそい
15. 物がなくなると母は大さわざする
16. 理由を聞かないで頭から叱る
17. しかられて、大切なものを破損されたとき、いいわけをすると小言だといつて叱る。だまつていると反抗するといつて叱る。したがって正しいことでも何も言えない。
18. ほしいものを買つてほしい
19. 親子だけでくらしたい
20. 父は日曜でも家にいない
21. 毎日の生活がいやになつた
22. 自分を疑問に思う
23. もつときびしくしてほしい
24. 勉強中に用を言いつける

## ○わが子の教育についての父母の反省

この調査は、わが子の教育について、反省を要すると思われること10項目を示し、反省したいと思う項目に、○印をつけてもらった。その結果が次の表である。

わ が

質 問 並 答  調 査 校	1		2	
	いつ対子 なけしど りな、も にいけの なでし つめ求 ていをに		よ何耳子 うでをど とも傾も し押けの てしな言 ついでに	
	い る	い ない	い る	い ない
芦 城 小	7	73	12	67
小 立 野 小	11	72	12	71
金 石 小	5	88	13	78
森 本 小	7	61	7	61
笠 間 小	10	42	7	40
山王小(袖江)	9	41	2	48
小 木 小	15	49	14	48
兼 六 中	6	58	11	50
高 岡 中	11	69	17	63
笠 間 中	7	49	13	51
中 部 中	2	14	4	12
春 日 中	8	67	16	57
合 計	98	683	118	646
順 位	10		8	

子の教育についての父母の反省

3		4		5		6		7		8		9		10		調査員
がてと子 しよばど ていかも 点りの を気悪 見にい のしこ		小のた子 言にとど を、思も をなくつ らどて悪 べくいか てどるつ		もい両 を叱親 まりの ど方一 わで致 せ子し てどな		て過と尊親 度か心の のら勝優 要子気 求ど越虚 をも感榮 しにな自		ほし親 めかの たつ気 りた分 しり本 て位で		要べても気 求な原のに をい因行か してを動か て過よに 度くつ子 の調いど		倒あし子 だそ合ど とぶいも 思こと共 つとをに てをもに 面に話		が困め両 つ、親 て子が いど不 るも和 こがの とた		
い る	い ない	い る	い ない	い る	い ない	い る	い ない	い る	い ない	い る	い ない	い る	い ない	い る	い ない	
40	33	33	45	23	51	10	66	32	48	27	52	24	55	11	65	83
38	46	32	52	20	63	7	76	28	55	23	60	21	62	4	79	83
51	41	58	31	22	67	22	65	38	50	44	45	28	65	11	78	94
34	34	28	40	21	47	5	63	26	42	22	26	10	58	5	63	68
25	31	20	30	16	38	7	47	25	31	11	40	12	41	10	44	68
28	22	26	24	15	35	2	48	15	35	16	34	12	38	7	42	50
28	33	24	39	16	46	12	48	33	28	28	39	19	41	14	47	69
45	18	33	31	12	49	8	55	25	37	25	35	16	47	6	53	75
47	32	41	40	11	67	14	63	34	43	35	43	17	61	11	66	82
36	31	29	38	17	47	16	48	41	25	28	37	20	44	10	55	69
11	6	8	9	9	8	4	11	9	7	7	9	9	8	5	11	18
29	39	34	41	13	64	13	55	31	41	29	43	31	40	10	62	80
412	366	368	410	195	582	120	645	337	442	295	463	219	560	104	665	839
1		2		6		7		3		4						

以上の二つの調査の結果をみると、父母の反省を裏がきするように、子どもの不満が述べられている。これがわが国の現在の家庭の実態とすれば、大いに考えさせられることである。

この調査をとおして考えられる親子関係の問題点をあげてみたい。

○第一は、『親不在の家庭となっていないだろうか。』

鍵っ子の家の扉は、鍵で開けられるが、親子の心の扉が開かれなかつたら、開かれる機会がなかつたら、親子は同居しても、親不在の心の鍵っ子となるであろう。子どもたちの父母に対する不満が、この点に集中されていることは注目すべきである。

- ・私と一しょに遊びに出かけてくれない。
- ・私とゆつくり話し合う時間がない。
- ・相談相手になつてくれない。
- ・勉強について教えてくれない。
- ・父も母もいそがしい。
- ・るすをすることが多い。
- ・父の帰りがおそい。
- ・父は日曜でも家にいない。
- ・親子だけで暮したい。

父や母がいそがしくて、家を留守にし、子どもの相手になりたくてもできないのは仕方ないとしても、親の反省として出ている。

- ・子どもと共に話し合い、共に遊ぶことをめんどうだと思つている。

のは、大いに反省してもらいたい。

○第二は、『子どもをよく理解し、親の愛情が正しく行動にあらわれているであろうか。』

子どもたちは次のように訴えている。

- ・勉強について、口やかましくいう。

- ・小言が多過ぎる。
- ・私の気持や考え方をわかつてくれない。
- ・父母は私の力では、とてもとれそうもない成績をのぞんでいる。
- ・子どもに対して不公平なことがある。
- ・私にきびしすぎる。
- また父母も、次のように反省している。
- ・子どもの悪いことばかり気にして、よい点を見のがしている。

・親の気分本位で、しかつたりほめたりしている。

・気にかかる子どもの行動について、原因をよく調べないで、気をもんだりしている。

・子どもの言い分に耳を傾けなくて、何でもおしつけようとしている。

・子どもの要求に対し、けじめをつけないでいいなりになつている。

○第三は、『信頼されるよい父母であるだろうか。』

まことに遺憾なことと思うが、子どもたちは次のように不満を述べている。

・父は母に対し、むりなことをいう。

・両親はよくけんかする。

・子どもには口やかましくいうが、父母の生活はだらしない。

・ちよつとしたことで暴力をふるう。

・母は約束を守らない。

など、父母に対する期待が大きいだけに、不満なことは少くない。

父母も、姿勢を正すべきことを自覚し、深く反省している。

・両親の一致しない叱り方で、子どもをまどわせている。

・両親の不和のため、子どもが困つていることがある。

○第四は、「子どもが健全に成長するのにふさわしい家庭の生活だろうか」

この点は、親子関係の調査では、子どもが家庭生活について不満に思っていることを訴えている中で、

・おちついて勉強する部屋がない。

・毎日の生活がいやになつた。

というのがあつて、氷山の一角として、家庭生活に対する問題点が頭を出しているように思われる。参考までに、昭和40年度に行なつた家庭教育基本調査をみると、学庭の道德生活について、次のよう調査結果が出ている。

・あいさつや言葉づかいが、よくできていない。 56%

・家庭の生活にきまりがない。 31%

・子どものしつけについて、両親の考え方がちがう。 26%

・家庭がいこの場となつていない。 6%

・家庭で宗教的情操が養われていない。 42%

・子どもは希望をもつていない。 21%

・子どもの信頼に価する親の生活態度ではない。 21%

私どもの行なつた家庭教育についての調査は、科学的でないだけに、信頼性が少いであろう。しかし、動揺期ある日本の家庭の実態をうかがい知ることができ、明るい健全な家庭づくりの問題点を発見し、家庭教育の努力点を明らかにすることができたように思う。大学の先生方をはじめ、先輩各位の御指導を期待するものである。

## Ⅱ パネルディスカッション

司会者	福	島	好	江
提案者	丹	後	忠	一
	深	見	や	よい
	石	井		幸
	上	原	留	意

丹後忠一（家庭教育についての総括的な問題提起）

今年の3月まで学校の教員をしておりまして、これまで学校教育との関連において家庭教育について考えてきたことを述べてみたいと思います。

学校教育とは異つて、家庭教育が人間形成において担当しなければならない最も重要な面は、子どもの情操的な面、性格形成の面であると思います。これは人間教育の基礎でありまして、学力を伸ばす教育や知性の向上は学校教育に任せなければならないとしても、この面は学校に任せることのできない、家

庭がどうしても果さなければならない子どもの教育上の責任であります。

では、家庭はどうして子どもの情操の安定を計つたり、性格を形成したりして、子どもをしつけることができるでしょうか。それは、白々の家庭生活、毎日毎日の生活そのものが教育の方途であり、生活のなかで教育が行なわれるところに、家庭教育の特色があります。ですから、私たちが家庭教育研究会で一緒に読んでいるテキストに、「親が真剣にいとむじつさいの生活、父母と子どもの触れあつていく日常の行動そのものが子どもの心にとつてじつは教育のはたらきをおよぼしている」

と書いてありましたように、まず親が自分たちの生活そのものに責任を感じて、まじめな生活態度で日々の生活をおくることが、子どもの教育上一番大切なことだと思います。

このように家庭教育においては、日常生活そのものが大切ですが、つぎに家庭の特別の行事や部落の行事などの機会をのがさないで、家庭教育に活用することが必要です。たとえば、冠婚葬祭の行事とその時の雰囲気は、子どもの心にとくに強く印象づけられ、その後の子どもの人間的、精神的な成長になく影響を及ぼすものです。おめでたの際に親戚が集ってお祝いをする行事の雰囲気は、いつまでも子どもの記憶に残るものです。

つぎに、家庭教育における母親と父親の役割とその分担の問題ですが、中心的な役割を演じているのは申すまでもなく母親ですが、しかしただ母親だけでなく、その背景に愛情で結ばれた家庭の人間関係と、平和な、楽しい家庭環境が必要なこともいうまでもないと思います。そこで母親について問題になるのは父親のあり方です。父親が家計をたてるために多く家庭の時で職業に従事し活動しているために、子どもの教育における父親の役割が母親ほど目立たないのは当然ですが、父親はたとえ表面に立たなくても、家庭教育の重要な一面を担っております。つまり母親を通じて間接的に子どもに働きかけて、家庭教育を方向づけるところに、父親の重要な役割が見られます。たとえば、父親は広い社会的視野に立つて時々子どもに社会に処する心得をさすか、進学、就職、結婚など子どもの人生において重大な決定を迫られる際に適切な助言を与えて、子どもの進路を正しく決定する役割を果たさなければなりません。また、男

の子どもに対して父親が自分の人生経験を語るとか、時事問題について意見をたたかわしたりして、いわば子どもの友人のような親密な間柄になつておけば、父親に対する子どもの信頼感も高まつてきて、いろいろな問題や悩みに対して父親の意見や助言を求めるようになると思います。こうすれば、家庭教育がこれまで多く見受けるような母親任せの状態から脱けだして、父親と母親がそれぞれの立場で責任を果し、協力し合つた正常な姿にたち帰ることができると思います。

最後に家庭教育の正常化ということについてもう一つ大切な点は、学校教育と家庭教育のけじめをつけて、学校教育の延長のような家庭教育におちいらないように気をつけることです。今日教育に熱心な家庭の中には、家庭学習にだけ力をいれて、学校の勉強をあまりにも家庭にもちこみすぎている家庭が多く見受けられようです。家庭教育の特色は、見守つてやる教育、いたわつてやる教育、共に考える教育にあるといつてよいでしょう。消極的というか、直接に子どもに教えないで、子どもの生活環境を整えて、子どもの成長を見守り、励ましてやるのが家庭教育上最も大切だと思います。

以上で、私の家庭教育についての全体的な提案と致します。

深見やよい(主として幼年期の家庭教育について)

現在小学校の4年と2年の子どもの母親で、幼年期を離れておりますが、主として幼年期の家庭教育の問題について提案するように割当てられましたので、すこしばかり気づいた点を申しのべて見たいと思います。

私たちが勉強しておりますテキストに、本来の家庭教育が忘れられ、おろそかにされていると書いてありましたが、私も本当にそうだと思います。幼年期の家庭教育はほとんどしつづけに終始すると思いますが、たとえば排尿、排便などは4、5才位までに自分でできるように、また朝夕の挨拶などもひととおりキッチンとできるように日常の基本的な習慣をしつかりとしつけることが大切です。このような幼年期の家庭教育は、ほとんどもつぱら母親の責任であることは申すまでもさりません。

私の聞いた話ですが、ある若い奥様の家庭では、おばあちゃんのお孫さんに対するしつけがとても厳しいようです。たとえば、お食事の際に茶碗を手で持たなければいけないとか、足をくずしてはいけないとか、厳しくしつけていらつしやるようですが、お客さんがお見えになつた時などは、挨拶ができなかつたり、お菓子を欲しがつたりして、若いお母さんがはらはらして心配していらつしやるようです。でも、早川元二さんの御本のなかに、幼児はお客さまが好きで、来客のある時には陽気にはしゃぐものであるから、お行儀のことは多少おお目に見てやつてよいというような意味のことが書いてありましたから、さつきの若いお母さんほど心配なさる必要はないと思います。しかし、4、5才位になると、だんだん大人の言葉が理解できるようになりますから、話してやり、分らせて、少しづつしつけを徹底させることもできるようになると思います。

今日多くの家庭で、幼児のしつけが果してどの程度しつかりと行われているのでしょうか。ある幼稚園の先生からお聞きした話ですが、

子供を幼稚園まで送つてきて、その後も子どものことが心配なためか、幼稚園のまわりをウロウロしているお母さんが時々見かけられるようですが、その先生のおつしやるには、「幼稚園か自分の子どもかどちらかが信用できないお母さんなのでしょうね」とのことです。40人の園児中10人位は、お箸の持ちかたその他食事の際のしつけができていないそうです。今日の若いお母親たちは、幼児期の基本的なしつけよりはむしろ、字の読み方や数のかぞえ方を教える方に関心がよるように見受けられると、さつきの幼稚園の先生が話しておられました。

幼年期や少年期の家庭教育におきましても、母親がつとめて子どもと話し合える時間を作ることが大切なことは申すまでもありませんが、私の家では食事中や他の時間よりも、お風呂場が子どもたちと私の一番楽しい話し合いの場となつております。ゆつくり時間をかけて、一時間ぐらい子どもと一緒に風呂に入つて、いろいろと楽しく話し合うことにしております。

さつき、家庭教育における父親の役割と協力のお話がありましたが、私の家では子どもの幼年時代には主人はほとんど子どもの世話やしつけを手伝つてくれませんでした。でも夫婦の間が円満で家族がむつまじく楽しい雰囲気であれば、それが子どもの成長に一番よいことではないでしょうか。

さらにまた、近頃の家庭教育におきましては、家の外での友だち関係とか、テレビの影響などが問題になつていようですが、これらの問題はそれほど神経質に心配しなくてもよいように思います。

石井幸（主として少年期の家庭教育について）

現在6年と4年の2人の男の子をもつている母親ですが、少年期の家庭教育について2、3考えておりますことを述べてみたいと思います。

近頃は学校の勉強がすっかり家庭に持ちこまれて、家庭教育が学校教育の延長みたいになつていますが、家庭教育で一番大切なことは、何といつても両親が自分の日常生活をふりかえつて、人間としてまた社会人としてまじめに生活しているかどうかを反省してみることだと思います。私どもが母親として毎日充実した生活を送っているかどうかを反省してみなければなりません。

一般に私ども婦人は毎日の家事に追いまわされて家庭のなかに閉じこもりがちですが、つとめて婦人学級とかその他の公民館の講座などに出席して視野を広め、政治やいろいろな社会問題にも関心をもつように勉強するように努めなければならないと思います。国の政治や教育の動きも私たちの選挙の際の一票とつながっているわけですから、ふだんから政治や教育の動きに関心をもつて、勉強していきたいものだと思います。

けれど、あまり家を留守にして外にばかり出回っていると、家事がおろかになつたり、子どもが鍵つ子みたいに放任されることになります。もちろん、鍵つ子の問題といつても、母親が外へ働きに出なければならない理由を子どもに分るように話して聞かせ、理解させておきさえすれば、母親がいつも家にいて子どもを甘やかしたり、世話をやきすぎるよりも、子どもの自主性や独立心が養われて、かえつてよい結果を招くかも知れません。

鍵つ子のことではありませんが、ある子ど

もさんが学校で先生になじめないためか、いつもおどおどしていて落つきがない態度で、お母さんがどうしたらよいか心配しましたが、担任の先生にもご相談して、力を合せて導いていつた結果、その子どもさんの態度が次第によくなつていつたという話を聞いたことがあります。お母さんが家でひとりくよくよ心配してしないで、子どもさんのために積極的方法をさがしていけば、道が開かれてくると思います。子どもの導き方でも、その他何事にしても、しんけんに取り組んでいけば解決の糸口が見つけだせると思います。

子どもとの話し合いのことですが、もちろん幼児や小学校の低学年の子どもには言葉よりもむしろ態度や行動で示すことが大切でしょうが、子どもがだんだん大きくなりますと、しだいに世の中のことに興味をもつようになりますから、私どももつとめて社会の問題などについて子どもと話し合いをする必要があると思います。子どもたちは、時々ひやかし半分に世の中のことを論じたり、一面的な見方しかできませんが、だからこそおとなのものの方をも話して聞かせてやつて、子どもの考え方を指導していくことが大事です。

さきほども子どもとの教育に対する父親の協力が大切だというお話がありましたが、子どもがだんだん大きくなるにつれて、父親もつとめて子どもとの話し合いの時間を作つて、いろいろな問題について自分の考えをも述べて、子どもと議論することが必要ではないでしょうか。父親は家ではあまり勤め先のことや仕事のことを話したがりないようですが、時々社会問題などについて子どもと話し合い、議論するのがいいと思います。そうした話し合いのなかで、子どもが父親の生き方や考え



方から人生のことを学び、自分の仕事に誇りをもった父親の生活態度から社会人としての生き方を学んでいけると思います。

上原留意（主として青年期の家庭教育について）

2才から15才までの1男3女をもっている母親として、青年期の家庭教育について私の感想を少しお話してみたいと思います。

青年期はかなりの期間にわたっていますが、主に中学から高校にかけての時期の子どもの家庭での導き方について考えてみたいと思います。この青年期は、申すまでもなく、子どもからおとなになる過渡期で、身体的にも精神的にも最も変化のはげしい時期で、人間の一生のうちできわめて大切な時期です。ですから、青年期の家庭教育にはいろとむづかしい問題があります。

青年期の問題として子どもの劣等感をどう解決し、指導してやるかという問題がありますが、私の子どもの例で申しますと、3女が学校でよく2女と比較されて劣等感におちいつて、すっかり消極的になってしまいましたので、励まして元気づけてやるのが大切と思つて、「あなたには姉さんにないいいところがありますよ」とよくほめてやるように努めました。高校への進学の際も、学力にあまり自信がなさそうで、姉と別の高校へ入学を志望して、今はその高校へ通学していますが、高校へ入ってからスポーツクラブに入つて運動を楽しんでいるうちに、少しずつ自信もついて中学時代はきわめて消極的な子どもでしたが、今ではほとんど劣等感から解放されて、元気に通学しております。

第2に、青年期の特徴として、ふつうに個

性の確立ということが挙げられておりますが、青年期は自我を確立し、自分の個性を発見するうえで最も重要な時期です。私の経験では、子どもたちがだんだんはつきりした個性を表現してくるのは、中学生の頃からでした。したがつて、青年期には読書がすごく大切だと思ひます。読書を通していろいろと人生や社会のことを学び、考へて、自分の人生の設計をはじめるのだと思ひます。私の2女は小学校の5年生の時に雨月物語を読んで読書に興味をもつたせいか、大学に入つてからも古典ばかり読んでいるようです。長男は高校3年生で、受験勉強に忙しくて、参考書以外にほとんど読書の時間はありませんが、これは悲しいことだと思ひます。青年期における人間形成のためには、読書がこの上もなく大切なことだと思ひます。マンガでも、何も読書しないよりはましだと思ひます。また青年期になれば、どんな本が自分のためになるか読む書物を自分が選択する力がついてくと思ひます。

青年期の人間形成に読書と同様に重要な役割をもっているのは、友人です。とりわけ、青年期になつてはじめて精神的なもので結ばれた、ほんとの友人を持ち始めるのです。私の長女と長男は付属中学に入つたために近所によい友人がもてませんでした。次女と3女は公立の中学校でしたので、近所によいお友だちが得られたようです。次女などは、中学時代に友だちと仲よしグループを作つたりして、親密につきあつていたようです。高校や大学に進学するようになってから中学時代の仲よしグループもチリチリに別れるようになりましたが、今でも文通したり（男女間の交通は必ず葉書だけということに決めて、

それを実行しています)、休暇で帰省したときには電話で連絡してお互いに行き来して、健全な交際をつづけています。入学試験のためや、そのための模擬試験のために、お互いに競争意識をもつて、そのため仲のいい友だちもバラバラに離れてしまうといわれていますが、2女のグループはお互いに助け合い、励まし合って入学試験の勉強をしたようです。青年は時々深い孤独感におそわれて、そのために心の友を求めるのだといわれておりますが、親として子どもがどんな友人と交際しているかを注意深く見守つて、友だちの選択や交際の仕方について、必要な場合には適当な忠告や助言を与えてやる必要があります。けれども、母親が自分の好ききらいの感情から子どもの友人について批判したり、非難したりすることはつつしんで、あくまで子どもを信頼し、子どもの自主性を尊重してやるのが大切だと思います。

(以上のような意見発表もしくは提案に基づいて大体以下のような要旨の自由討議が行われた)

〔橋 本〕お年寄りのいらつしやる家庭の家庭教育において、お年寄りが為になるとか、かえつて支障になるといつたようなことがありましたら、お聞かせ下さい。

〔丹 後〕77才の母がいますが、私の子どもは皆大きくなりましたので、最近では年寄りのいい影響とか、困ることはほとんど感じなくなりましたが、しかし子どもの小さかつた頃には、子どもの育て方についての私たち夫婦の考え方と租父母の考え方のずれといつたようなものを経験したことがあります。お年寄りが昔風の考えで孫の育て方やしつけ方に口出ししますと、若い親の考え方とくいちがう

のは当然でしょう。しかし、若い両親には宗教的信仰がうすいが、この点お年寄りがいてくれますと、仏壇のお参りなどを通して子どもたちに宗教的情操教育について影響を与えてくれるというプラスがあると思います。私の家では大きくなつた子どもたちが、祖父をうしなつた祖母に、「仏壇でおじいさんとデートしないのですか」などとじょうだんをいうことがあります。たしかに子どもたちは祖母を通して宗教心や祖先崇拜の気持が養われたようです。

〔深 見〕私は困る一面を例に申しますと、私の家には62才と56才の両親と、その上85才の祖母がありますが、父が恩給をいだいた時などにすぐ子どもにいろいろな品物を買つてやつたり小使いをやつたりして子どもを甘やかします。もう一つ困ることは、母が子どもの前で時々私に小言をいうことがありますので、子どもに対する私の権威がぐらつきます。子どもには、母親としての私の影響よりもおばあちゃんの影響の方が強いかも知れません。

〔年輩の一男性〕家庭における若い夫婦と老夫婦の世代のズレをなくするためには、家庭生活は若い夫婦を中心とすべきで、年寄りは遠慮した方がいいと思います。家庭の重大な問題については、年寄りも自分の意見を述べるとしても、ふだんはあまり小さなことに干渉しない方がよいでしょう。たしかに近頃の若い人々には道義が低下し、礼儀も多分乱れているように見受けられますが、年寄りが若い夫婦に代つて孫たちをしつてたり導いていくことができるかどうか疑問です。年寄りは年寄りの立場を守つて、あまり孫の育て方やしつけ方に口出ししないで、年よりとして自

分の生活の楽しみや信仰を求めて生きていくべきでしょう。

〔一男性〕お年寄りの思想や人生観のズレで困ったことはないでしょうか。

〔石 井〕嫁と姑のいざこざの話はよく聞きますが、そうしたことは子どもの教育上困ったことだと思います。どうせ仲よく暮せないのなら別居すればいいのでしょうか、それができないとすれば、何とか仲よくするようにお互いに努力する他に途はないでしょう。

〔上 原〕私の体験ですが、私のなくなつた母は嫁とは外面的には仲よくしていましたが、心の中ではいろいろと気に入らないことや不満があつたらしく、時々娘である私の学（実家の近くに住んでおりますので）にきて愚痴をこぼしていましたが、私がウンウンといつて聞いてやると母の気持ちもおさまると思つて、母の愚痴話の聞きき役になつてやりました。

〔深 見〕お年寄りも、たしかに宗教的情操や道徳心のしつけで、孫によい影響を与えてくれる面をもつていらつしやると思います。

〔一女性〕宗教的信仰のことですが、私は子どもの頃に父を亡くしましたが、子どもの頃から私は父は仏様になつて私を守つていて下さるのだと信じてきました。

どんな事にぶつかつても、取り乱さないで落着いて事に処してることができたのは、そうした信仰のお蔭だと思ひます。子どもの頃に養われた宗教心は、一生続くものだと思ひます。

〔一女性〕子どもは小さい時分から厳しくしつける方がいいと聞いておりましたので、子どもに、厳しくして、お金なども一切持たせなかつたが、その為か子どもがお金の誘惑にまけて家のものを持ち出すような結果になり

ました。きびしくするというのも程度問題で、子どもがうまく環境に順応していけるように、緩急よろしきを得なければならないのではないのでしょうか。

〔丹 後〕子どもが大きくなると、友人とのつきあいもあるようになりますし、そんなことはお構いなしに、親の一方的な考えを子どもにおしつけるのはよくありません。子どものしつけは事柄によつてその度合いを考えて、ただ優しいばかりだとか、甘やかすばかりといつたような一面にだけ流れてはいけないと思ひます。

〔一女性〕食事のしつけのことですが、食卓の作法をきびしくしつけて、お行儀よく食事させた方がよろしいのか、それとも少しぐらいお行儀をくずしても楽しい雰囲気ですら食事させる方がいいのでしょうか。

〔司 会〕子どもの家庭におけるしつけ方や導き方について、いろいろと適切な問題が出てきて話し合いが面白くなつて参りましたが、予定の時間が参りましたので、残された問題につきましても日を改めて話し合ひなり、お互いの家庭に持ち帰つて家庭で話し合ひことにしまして、今日の討議はこれで打切ることと致します。今日は皆様どうも御苦勞様でした。

金沢大学社会教育研究室  
昭和41年度共同研究集会第5回  
記 録

昭和41年度研究テーマ

現代社会における家庭の関係

——今日の社会に対し家庭は何をなしうるか——

第五回研究集会

テ　　マ	家庭のなかの宗教のあり方
期　　日	昭和41年11月26日(土) 13.30～16.30
日　　程	13.30～13.50 テーマ並びに日程説明
	13.50～14.50 問題提起のための研究発表
	14.50～16.00 全 体 討 議
	16.00～16.30 討議のまとめと評価
会　　場	金沢大学教育学部会議室
担　　当	仏教思想研究会
出 席 者	31 名

## I 開会挨拶ならびにテーマ・日程の説明

永 守 良 治  
橋 本 芳 契

挨拶（永守） 本日は「家庭のなかの宗教のあり方」を主題にご討議ねがいます。戦後既成宗教はその權威を失墜し、一方新しい宗教がスバラしい——有史以来はじめてというほどのいきおいでひろがっております。ことに現在における新興宗教については、現代人をなぜそれらがひきつけているか、私は大きな疑問をもっています。そんな点について、ここでは発表者と共に参会者全員が活発に意見をたたかわし、ご討議くださるようお願いいたします。

（橋本） 私の方から本日のテーマの説明と日程のあらましを申しあげます。

本日は共同研究の第5回目であぬますと共に最終回として前4回に対するしめくくりの意味ももつかと思います。

まず戦後における宗教のうつりかわりについて反省してみたいのであります。

第二に、とくに宗教の家庭性について、あるいは逆に家庭の宗教性について考えてみたいのであります。

第三には、戦後のいわゆる新生活において宗教が占めさせられた地位や意義についてつまり、戦後の社会生活でとくに強調されたのは個人生活の充実であります、そのなかで宗教が果すべき役割を考えてみたいのであります。いわば個人と家の関係における宗教の立場の問題であります。

第四に、「形」としての家のうつりかわりに伴う宗教のありかたの変化、具体的には

家庭内における宗教行事のもたれかた等の実際について反省してみたい。

第五に、真の宗教とはどのようなものであるか、そのことをとくに家庭を場とした親子・兄弟・夫婦その他の具体的な人間関係の実際を通じて、「救済の実証」の問題のうえてどのような理論的および現実的なことがらがあるか、とくにここは社会教育の場でありますから、みなさまと共に研究し討議してみたい。

要するにこれらの問題点の背景となった、直接には戦後23年の生活経過をかえりみながら、いうなれば「家における宗教の可能性」ということについて、つまり「宗教」は今の世にいるかいらぬか、もし必要とすればこれをどうすればよいのか、その理論づけと社会的教育的実践の方策を工夫してみたいのであります。

本日は仏教思想研究グループのなかから、かねて互選をいただきました6人のかたがた——他にいまひとり島口雅光氏を住職の立場から是非にと予定しましたがご本人の支障のためとりやめました——に、まず問題提起をかねて意見発表をねがい、そのあとで全体討議にうつるつもりであります。なおこの席へは新谷主事をはじめ、神力・沢田両教授もご列席ねがい得まして光栄且非常なしあわせに存じます。のちほどどうか忌憚なくご指導ねがいあげます。

発表者のお名前は次のとおりです。

（発表順） 細川忠蔵 中田きみ子

岩本又次 前川清一

家奈美子 藤 順了

各人大体10分づつにおねがいたします。

## II 意見発表（当日の発表は以下要旨略記。全体については本稿付録を参照ねがいたい。）

### (1) 13.50～14.00 細川忠蔵

1. 自分とは
2. 人間とは
3. 今の私
4. 私の仏教観

何も知らない私には、仏教を信ずる以外に道がない。家庭にあっても「人間らしさ」を求める私であるが、一向にうだつがあがらぬ。親鸞のおしえにしたしむようにつとめている。私は人間を学びたい。それには智慧も学歴もいらぬ。太閤を見よ。私は二重三重の人格で、何が何だかわからない。そのわからないのが自分だとしている。しかし因果の法則（業）のことは信ずる。神仏に祈願することはある、しかし自分の損得を考えてではない。私の苦悩の根源は私自身にある。自己とは何ぞや。すべて自己を出発点として歩きたいものである。私の仏教観としては、薬の効能がきだけでは駄目なので、大切なことがきかれぬので、只今安心したいということがある。来年をまつためのものでない。鈴木大拙先生は「鉛筆は書くもの」といわれたが、そうだと思う。まんじゅうは食べるものである。宗教については、すべてうけとり方がまずいのだと思う。要するにもっと自己を明確にした生きかたをして家庭人としてすごしたい。

### (2) 14.00～14.10 中田きみ子

人生の幸福について、心のよりどころとすべきものはいろいろある。理智もあるが、最後はやはり信仰でないか。しかし現在、仏教は死後を主にしているが、若い者は死後など考えない。私は心の真のよりどころを与えるのが正しい仏教であるとする。歎異抄を買って読んでみたがわからないけれども、何か「人と人との出会い」を大切にするように教えていると思う。私に祖母があつて信仰の目をひらいて下さったが、老人のいるいないで家庭の信仰もちがうものであろう。只今子供と三人いるが、別段宗教の話をすることはない。信仰は強いられるものでない。子供なりに体験してやがてわかることと思い、感謝しましょう、うそつかぬようにしましょうと毎日つとめている。人生の岐路に立つたとき、信仰のあるなしで大きなひらきがあるにちがいない。岡本一平、かの子夫妻の人生転機の記録には感激した。自分は自分としての信念をいだきつつ、つねに心の中に幸福を念じて進んでおります。

### (3) 14.10～14.25 岩本又次

私の問題は、子供にどのようにして宗教心を育てるかである。以前の（註、元校長）話す立場から聞く立場になろうとしている。私の生活経験からは、学校教育の中で宗教的情操の教育をすることがいかに困難であ

るかを思う。そこには教師が宗教をどのよう  
にみつめているかの問題がある。私は師  
範のとき、島谷（俊三）先生に「教行信証」  
について尋ねた。先生は自分で体験せよ、  
といわれた。宗教心のばあい、学校よりも  
やはり家庭である。仏教の真実を求めない  
で宗教を論じても効果がない。真宗教団に  
ついても正しい仏法の理解がいる。「あり  
がたい」いうことに本当に心づけば、外見  
は悲さんのものでそこには信仰による心の  
満足がある。それは驚きに類したものであ  
る。家庭生活の正しさがその方面から要求  
されるゆえんである。親子の関係がごく自  
然であることが宗教的なもののものである。  
三つ児の魂百までもというが、親子の愛情  
や家庭の感化力は絶大である。家々にはそ  
れぞれの生きかたがあろうが、家族員ひと  
りひとりの人生方向はやがて家庭内でふか  
くつちかわれることである。個性あり、時  
代に即応した人間ののびしかたも、そこか  
ら発することであろう。今は科学時代であ  
っても、靈魂の不滅などは科学的に実証し  
うることでない、むしろ不思議なことであ  
る。真の完全ということとは科学の力だけで  
は得られない。科学の奥に絶対価値の世界  
があるのである。そのところを心の浄土、  
安楽国土とよぶ。仏教教団は改めて門をひ  
らきなす必要があるであろう。純真無垢  
な家庭環境の浄土ということを考えたい。  
その感化力をおもえば「宗教的慣行」も一  
概にすてるべきではない。神仏に対し、敬  
虔な報恩感謝の心をもっていくこと——父  
母の生活態度そのものが子供のうえに宗教  
的な芽をそだてていくであろう。したがっ  
て家の伝統についても、宗教的な中正な態

度や精神が大切である。如来、本願、他力  
浄土などことばの正しい意味を理解し、彼  
岸・お盆等の行事についても抹香くさくな  
いとなみが必要であろう。いわば俗にい  
て俗に堕しないことが家庭における真の宗  
教のありかたなのである。

(4) 1.4.2.5～1.4.3.4 前川清一

私は、仏教を家族にうけつがせたい、その  
話をしたい。まず私の家における仏教のあ  
り方、それを今まで守りつづけてきた理  
由です。家庭生活の實際にふれて仏教はど  
う考えられなければならぬかということ。  
家に8人の法名があるが、私は26才まで  
に姉、実母、弟等次々に肉親の死にあった。  
キリスト教については幻燈を小さいとき見  
にいて叱られた。そんな家庭であった。  
子供心に、人間は最後的にすげれないのだ  
愚痴といふことがある、もっと人間を超え  
たものをと求めて青年期にはんもんした。  
そして友松先生の話などで本気で仏教に向  
うようになった。「父の志」に「26年の  
私」をプラスしたものが私の仏教である。  
しかし、肉親の死を見た私にくらべて今の  
家族は、両親を超えた仏（ほとけ）を知ら  
ないでいる。われわれには日々わが姿勢を  
正すための鏡がほしいものだ。その鏡とい  
う生活対象は仏教であり、茶の間の中心に  
ほとけの教えをおきたい。そうすれば知ら  
ず知らず、宗教精神が血となり肉となるの  
ではないか。「期待される人間像」という  
ようなことも、それによるでなければ本当  
の実現がむづかしからう。

(5) 1.4.3.4～1.4.4.2 家奈美子

家庭の主婦の立場からのべる。五人の子供の母である。私は珠洲の生まれでのち金沢に出た。今の家には仏壇も神棚もなく、今日の会にも主人は出る資格がないと言った。しかし是非にのべたいことがある。それは幼少のときうけた父母からの、この世に神・仏ありという生きた教育である。それが今日まで60年近い歳月のささえになってきていた。宗教的情緒につつまれて生き、生かされることが人間の一生にとっていかに大切なことであるか。私は女子師範時代に希望社（註 後藤静香氏主宰）の本をよみ、それがとしごろの私を宗教的雰囲気にもちびいてくれた。信あるものの心やすらかさである。人間関係は微妙で、ふとしたことに腹もたつが、そんな時の心のささえは宗教なのである。そういうことを親としては自覚し承知しながらも、これをいざ子供に与えようとするのが容易でない。絶望しているかといえば、そうでもない。家庭が子供に宗教心をどうして育てていくか家庭の中にその雰囲気をかもし出すように心掛けていくよりほかなかろう。仏壇がなくとも、仏像をおがませなくても、私はそれは芽ばえさせうるものと思う。

(6) 14.4.2～14.5.0 藤 順了

現代の若人もおいおい宗教的なことを考えている。本日もこのあとで私は白山公民館での仏青の会合にでる。「期待される人間像」にも青年に対しての方向づけが出されている。若い者に宗教がいらぬのか、私はお寺の四男に生まれたが、自己とは何ぞや、今、真剣に考えている。仏教は何を教えようとしているのか。白楽天と鳥窠禪師の話がある。「わるいことをするな、よいことをせよ」は三才の童児にもわかっていても、八十の老翁も容易にしないのである。武者小路先生の「人知るもよし、知らざるもよし、われは咲くなり」という花の境涯である。私は若者として正しくない生活をにくむ。しかし社会的関心をたかめる前にどうしても自己をどうハッキリさせるかが大問題であって、冢にあって仏青運動の中でもそのことと夢中にとりくんでいる。ご指導ねがいたい。

### Ⅲ 全 体 討 議

司 会 谷 口 喜 一

橋本先生 ご発表ありがとうございました。

これから全体討議にうつります。そのまえに全く余計なことですが、本日の主題のちなみに、私のメモしてきましたことを披露いたします。ちょうどなくなってことしが

150年目である福井県金津の永臨寺出身の真宗大谷派講師香月院深励は、金沢市八田部落に生まれ、のち高岡の開正寺に入った宣明院円乗と相ならぶ大学匠ですが、その「安樂集講義」巻三に、



今ボサツの家業を助けつぐというのは、ボサツは利他を仕事にしてござらせらるるゆえ衆生（人間）を済度するが家業なり……衆生をはこんでボダイ（さと）りにいたらしむ

ということばが見えるのであります。先刻来のご発表によって私どもはそれぞれに大きい感銘をうけました。そしてその根底に共通してあるものが、いまのことばの「ボサツの家業」ということであると思います。年令・職業・あるいは生いたちのそれぞれである中から、いずれも真剣にもえあがる信仰のさけびであったと考えますが、同時に内容的には最初におねがひしたような点にてらし、色々触れられていないものも少なくなろうと思いますので、これから活発にご参加の皆さまのご発言をねがいます。

<質問>の声あり。

司会者 一寸まってください。その前に発表者で補説したいかありませんか。

細川（第1発表者）宗教はアヘンなりというが、山腰（大樹）さんの話によっても「因縁果」は認めたい。（註、実はグループでたえず学習してきたこと）それが仏教の根本教理で、まことは衆生にない、仏のみにある。解脱は理論と体験の一致であります。津田外志男（出版業53才）家庭における宗教の伝承についておうかがいしたい。とくに橋本先生に……………。

橋本先生 祖父祖母と孫と、親と子と等の家族関係については先刻の発表中にもありました。とくに私は、岩本さんのいわれたように親と子の正しいおがみあい関係のなかに宗教的なものがあると思います。その

根底のうえに正しい道德関係が実現し、また社会的発展もあると考えますが……………。

神力先生 今日ご発表の皆さんには、自分の宗教、信仰を子供に伝える自信がありますか。学校教育における宗教の扱いは日本と外国とではちがいますが。

橋本先生 発表者がこたえられる前に……………。人間のあり方について、親子のあいだがらは「まこと」でつらぬかれる。新憲法で信教の自由が改めて保障されたが、学校教育法でも宗教についての教育は政治についての教育同様みとめられている。戦後まもない時期にアメリカ文化センターから「公教育における宗教」（Religion in Public Education）という本を借りて読んだことがあるが、もっと問題にしてよいことであると思う。津田さんへの答えにはならないが、私立学校での宗教教育にも今は疑問がもたれている。やはり家庭を主とすべきでないか。……………

神力先生 家庭、つまり親が子供に伝える、それでよいのだが、いまの仏教者は何を考えているか。子供に仏壇に参ることを強制するわけにはいかぬ、自分も幼時はやったが……………。宗教的信仰は自分でつかまねばならぬ。

沢田（忠治）先生 父はお同行でした。宗教上の問題は心理学の立場から申して、幼い頃から理くつぬきに日常生活のなかに、育っていく。その幼時期に育てられたものが青年期に自分で作りあげていく。東京の学生時代に感銘したのは「師はいずこへ」や「レ・ミゼラブル」の銀の器 — それを盗んだのでなく、与えたという宗教家の立場…………… さらに大学でナトルプを学び、

宗教的意識の問題を考えるようになり、また西田幾多郎の宗教哲学等により、人間の心の奥にあって必要なものが宗教心であると青年期に思った。それは今もって私の生活の基礎になっている。子供にも小さい時にはまいらせたが今はしていない。しかしそれを子供はつまらないと思っていないようだ。ご飯のとき、いただきますをいわない—お父さんは行動に表わしていると、娘は親の行動を見て正しく批判していることを感じた。批判のない幼児期に、宗教的情操を、家庭における宗教的行事を通じてしつける(ペスタロッチ)ことを信じている。

神力先生 本当の信仰は、自分でつかんだものでないといけないと思うが……自信がありますか？

前川 仏壇はこわしてもよいと思っている。それよりも、寺院がもっと青年をひきつけるようにせよ。

永守先生 家庭の両親の信仰についてですがフランスでは旧教で、教会へつれていかれて養われている。日本にもお寺参りの風はあるが、もっと家庭的にすべきでないか。日曜学校の経営もあるが、坊さんがいるのか。説教で果して宗教的なものが育てられるか。親鸞がいま出たならば、本願寺を破壊せよといわれるであろう。坊さんはその点を考えよ。

沢田先生 宗教的意識を家庭で育てていきたい。絶対なるものに帰依して、不安や孤独から救われていきたい。

神力先生 宗教的形成というものは子供により雰囲気にあたえる意味で必要である。教会の行事やその形が必要で、幼児期にはこ

とに形式が大切であろう。

永守先生 もっと寺が、しっかりせよ。

橋本先生 寺院は経済的にひっぱくしている。

しかもよくがんばっている。

神力先生 葬式は宗教教化によい機会である。

真宗以外の「他宗」はそうした際に、よく訴えるものをもっている。

橋本先生 真宗は教理的に平生業成というから、葬式は実質的に告別式である。なお、親鸞教と真宗とは区別すべきで、真宗あつての親鸞教である。(補註、親鸞がいま現われれば別な意味でもっとしっかりやれといわれよう)寺院のあり方はたしかに問題です……。

新谷先生 社会教育の立場から、いまの「輪禍」から子供の生命を守るために、神社、寺院の境内解放の必要があると思うが……。

沢田先生 富山県礪波郡の井波に参りましたが、高校にも中学校にも非行青少年がでないそうです。本願寺の井波別院があつて、各家庭がおちついているからだそうです。宗教はやはり家庭の幼時期です。

板崎彌一郎(無職69才 金石町) 井波別院の瑞泉寺の境内でバレーボールをしてガラスをわって遊んでいても、町民がみな門徒ですから、いたんでも叱らず、町民の門徒側で進んで修理するそうです。

前川(ここで発言あれど、よくききとれず)

新谷先生 家が貧困なその辺の学生で大野の会館にいたのが、卒業するとき千円札十枚を父にみやげにしていたことをおぼえております。たしか父親はまずしいほり物師だったと思います。

藤 寺だけせめてはいかぬ。教化についても「自信教人信」といって、悩をとともにする

のが本当だと思う。既成教壇もぼつぼつ街頭へ進出しているので、先年来「夏季仏教講座」を私共の手でひらき、ことのごとき「人間の問題への探求」で大きな反響を得た。同朋会運動もあり、ようやく目ざめる時期に際会している。井波別院の話につけ、故郷を愛し、これを大切にすることが必要と感じた。

司会 どなたか、何かほかに？

村上亀子（主婦・年令不詳・金沢市）子供を泉中学へやっておりますが、小さいときから物に感謝し、生かされていることを知らせる教育をしてもらっています。

畝本喜美枝（主婦・40才・石引町）家庭の中で感謝する心をもたせたい。決してひとりで生きているのでない。宗教的なめざめがそこにある……。

山下正位（公民館長・74才・加賀市南郷）人間の弱点をみてとってひろげられたのがアミダ仏の本願力で、宗教の魅力はたしかにそこにある。しかし他力だけではダメだ。おてんとうさまが見てござる……三木（大聖寺部落）のおいくサは信仰心の強い老人でしたが、子どもが石を投げた、それでもおこらなかつた。（註・加賀吉崎辺にてた妙好人なのであろう）

津田 宗教団体が何百とも何千ともあるときくが、病気をなおすについても入院すればなおるのに、お母さんに「お水」をあげたとかいろいろなことをききます。そんな形式で家の宗教ははたしてよいものでしょうか……。

北本義輝（不詳）逆境と宗教の問題ですか。

細川 先日、東別院で仏教講演があり、友松円諦先生と東本願寺の新門（大谷光紹）さ

んが対論し、別院輪番（牧一岳）さんが司会でしたが、仏教がふるわないのは門徒の責任といわれてその場ではわかりかねたがあとで考えるとやはり、わたしの責任なのである……。

新谷先生 坊さんの反省しないのは実にわるい。

細川（発言あれどよくききとれず）

神力先生 寺院をせめるわけではないが、現代の思考をくぐりぬけて、教養の立てなおしをし、偉大なる宗教人はそれとして時代時代の思想をくぐったものであることを反省し自覚してもっとやってほしい。

司会 一応、時間がまいりましたのでこれだけにしたいと思います。ありがとうございました。

## Ⅳ ま と め と 評 価

(橋本) 本日はまことに長時間ごくろうさまでした。なお私はここに「歎異抄の世界(すくいとめざめ)」という新書版の本を持参いたしましたが、これは全部で5冊になって出るはずで、その第一冊です。これは三重県松坂在の青年仏教会が、過去五ヶ年にわたり毎月一回、大谷大学の先生(伊東恵明氏)を招いて「歎異抄に聞く会」をずっと開いて、仲間の座談会もテーブルにおさめて一冊の本にしたもので、最初大体8人の者が中心でしたが、最後には80人以上にふくれあがっています。最年少は18才の農協に働いているような女性で、学歴は中卒か高卒程度が主かと思います。そういう事実を見て私は、教育には「社会」という大きな方向にあわせて「たて」の柱があるのでないかと思いました。教育には自分から出てまた大きく自分へもどってくるものがある。仏教思想研究グループはこれまでかれこれ10年間、いずれかといえば閉鎖的にものをしておりました。本日はそれをあらいざらい皆さんに見ききしていただいて、反省すべきこと改めるべきことがどの辺にあるかもいろいろと教えていただきました。参加者の皆さん、とりわけご発表ねがった各位にはともども今後一層にご精進を念じあげます。またご列席の諸先生には適切にご指導まことにありがとうございました。このあと永守先生のご挨拶でおわります。

(永守) 本日の会は、大変感銘ぶかいこと

でした。戸頃先生にも出ていただいて、批判的な意見をのべてもらえば「かなめ」が一層ハッキリしたと思います。家庭における宗教の関係は、現在の唯物主義的な社会にあってことに重要で、本日は現代の青少年の家庭内外におけるみちびきかたや、あるいは老人の深い信仰の話等もあって私は敬虔な思いで拝聴しました。民間人の話をきけと親鸞も言ったと思います。親鸞は時代のなやみをわがなやみとしてなやまれた。時代の民衆と共になやみ、そして考えぬかれた。そこから本当の信仰がでてきたのではないか。若い青年の信仰は、親鸞のはげしさももっとほしいと思います。研究室の諸先生のご発言がこれまでのどの会よりも多くて本当にありがとうございました。

新谷主事

これで本年度の「共同研究」を無事おわらせていただきました。大学はとかく理くつの多いところですが、いろいろとお世話をして皆さんの抱負を実現させていきたいと思っています。これからもこうした学習をかさねる予定ですので何分ともよろしくおねがいいたします。なお、研究室の季報にも、つとめて研究生の各位のお声ものせたい考えであります。どうぞよろしく。

(16.30おわり)

(記録在責 谷口・橋本)

## V 発表者の意見

自分を読む	細川忠蔵
家庭の主婦として	中田きみ子
家庭生活と宗教心	岩本又次
家庭における宗教のあり方	前川清一
宗教のお育てで過したわが半生	家奈美子
青年仏教徒の本願	藤 順了

以上発表順で掲げました。なお細川・岩本両氏以外は題名は編集者において仮題として付したものであることをご了承ねがいます。これらの論稿についてご感想おもしろく下さるれば幸甚です。

(橋本)

## 自分を読む

### 目次と序言

細川と申します。演題を、自分を読むと題し、第一章はじめに、第二章人間を読む、第三章今の私、第四章私の仏教観としメモを綴って見ました。亦結論を先に申しますと何も知らない、出来ない、知者や学者でない、迷ふて居る私は仏教を信ずる以外に人間形成の道はない様だと申し度いのです。

### 第一章 はじめに

各家庭の中には色々問題があるが、年長者世帯主主婦等の立場に立つ者は指導性とか統制力と云うか、そんな様な事も必要だが、その奥にほんとうの人間らしさがなくてならない。それを知るには先づ自己を知ると云う事が問題になって来ると思います。自己とはどんな私であろうか、自分が判らんわからん為に判らん自分の考えた自分を本当の自分と思うなさない私です。人間形成は各家庭内に信仰して居る宗教によって形成さるべきでないか。私の家は代々親鸞の教へを受けて居るからその考え方によって申すことになります。

細川忠蔵  
(医王園技師 63才 金沢市堅田町)

### 第二章 人間を読む

国家公務員共済組合新聞昭和40年9月15日付の紙上に「人間を読む」と題し柏葉介氏の一文が出て居りました。私も読んで胸にこたへるものがありました。人間を読むと云っても只相手の心持ちがくめる様になって居られる方はそれで人間が読めるので人間が出来て来るとちやんと読めるそうで、どこまで読めるかはその人の人間性次第で学歴とか地位とか云うものと人間性は別物らしいと書いてあり、亦「新太閤記」の秀吉の言葉として全面的に忠誠心や友情を求めては結果的には逆である。疑ひはうたがわれ信ずれば信ぜられ憎めばにくまれ好けばすかれる人の心は相照らし合う鏡の様なものとか昔から知って居ることを改めて思い出し、つとめて親しみを以て付き合う様にした、と秀吉の心がけがよく味おうことが出来ました。地位や学歴月給の高い安いや服装で決めることの出来ない人間性を家庭人として考え、それから物事をはじめてはどうかと思つて居ます。

### 第三章 今の私

私はどんな人間だろう、二重人格か三重人格か親にそっくりの男、血統は競へないとか遺伝性はあると云われて信じて居る。ある問題が起る毎に賛成反対中立わからん後日に成り反対した事が賛成に変わる事もある私で、本当の事が判らん自分だ。社会の出来ごとに判断の出来ない事が沢山ある。金婚式の夫婦あり、戦争未亡人で子供を立派に養育して居る人あり、思いもよらぬ交通事故、災害事故、新婚の初夜もすまない十何組が一諸に死亡とは此の世に神も仏も居ないのかと思う例は毎日新聞に出て居るのが今の社会だ。今日は人の身あすは我が身なりとも聞かされる。此の世は苦悩の世界だ、人間の幸福なんて苦悩から一寸飛び出すだけの、しばらくの幸福がたまに有るだけで、その幸福も亦苦悩の因となるとも聞かされる。ここで偶然だと思ふのが人間の考えから云う事で境遇の悪いのは運が悪いので、よいのは運がよいので神仏に祈って助けて下さいと云うのはある神仏や亡霊が私をこんな目にあわして居ると考えるからでこの様なのは自分を知らない人の考へて仏教の「因縁果」の法則と「業」と云う事を知らないから神仏に祈願をかけるのだそうで、私は何時も自分の立場から物を考へ自分の損得の事を考えてばかり日暮しをして居る。私の苦しみ悩みは他から私に取りつくと考えるのですが、それが何ぞ知らん、私の苦悩の根源は私にあり、自分の苦しむ仕掛けは自分が持つて居るので、私が酒をのんだらとなりの主人が酔っぱらった、そんな事は無い、この仕掛けにこそ問題がある事を自分に見出すと云う大きな変革が見事出来た。それが釈尊の成道であり、そこから生れた生活が仏教徒の生

活だが、私は今日まで生きて来たことの喜びだけしかもって居ない。出雲路先生は「自己とは何ぞや、これ人生の根本問題なり、あらゆる問題の根元は生である」と何時間でも話されるテレビ番組。ただ今一々人と云うのにお父さんが子供に自己と云うものをよく知って出発点とせよと云われる。北国新聞紙上で前県教育長談として自己に強くあれと云はれて居る。洞窟の入口を見て居る如く中は判らぬ自分私は、今自分の心に引きづり廻されて居る。これが迷うて居る今の自分と云う事になります。

### 第四章 私の仏教観（補足説明で）

1. 親鸞の教へで居るからその考え方になる。
2. 宗教は何片なり恋愛の様だと聞くが、否定出来ない様な事もある。
3. 因縁果の法則は成る程と信じて居る。
4. 人間衆生に誠は無い、誠は神仏の世界のこと。
5. 仏教では感謝の生活が願われる、拝む思想。
6. 理論にて解決出来ないもので「不可思議」と云うものあり、「法則」もある。

お寺参りも時にするが、薬の効能書を説明か宣伝して居る様を感じの事がある。何ヶ月後の卒業してから応用するのに必要のものでない今聞いてすぐ血と成り肉と成る様明日が判らん今安心して今晚にそなへたいのです。今年1月1日の北国新聞に鈴木大拙先生の対談が出て居た。先生はまんじゅうは食べるものだ先づ食べること、鉛筆は書くもの先づ書くことと云われて居た。聞く耳が悪いのですから困りますが、何とか食べさせてほしいと申し度いです。

### 第四章の補足説明

仏教観の第3項の説明を申しますと夫婦の仲に子供が出来た二人だけでこしらえたのでない出来る仕掛けは親が4人して亦その親が8人が関係して居る、その親親が関係して居る。お百姓さんが米を作ったのでないと山腰先生がよく説明される。お百姓さんはお手伝いをしたことになる。種は前の年その前の年から他から買って来る。太陽のお光、雨風のお陰も必要だ。太陽、雨、自然の力なくして米は出来ないと云う法則もある。第四項の説明するなら「二宮尊徳夜話」と云う本に出て居た。仏教には各宗派があるが一宗だけをよいと云う事は間違い、誠と云う事は我等衆生にない、

仏の世界のことで富士山の頂上の如く各宗派に登る道で御殿場口吉田口どちらからでもよい。頂上に通じて居ない入口からしばらくだけが邪道である。頂上に行かれるに間違いのない方途を解脱とか云う事で単に理論だけでつかめぬもので体験と理論が一体となつてはじめて達した境地である。動物と違うのは本能だけで自分の行動を決定せず、理性的法則により自覚的行動をとるところにある。科学は自然の法則を知ることではそれは使うため使われてはならない。理性的法則で物や心を使うことこそ人類の発達に望ましい、と聞かされて居る。

## 家庭の主婦として

中 田 きみ子  
(冢裁公務員37才 平和町)

どんなに幸福な人でも心によりどころがほしいものではないでしょうか。そのよりどころには、人それぞれに違いのあることは当然だと思います。例えば或る人は世の中のことは人間の理知によって解決がつくかのように、宗教を否定しないまでも、信仰をもっても、どうにもならない、と言う方がありました。また、若い方でも深い信仰をお持ちの方もあります。

私が思いますのに、(今の場合例として仏教を与えますが)おゝむね仏教は死後のことを説いてあるように思います。健康ではつらつとした若者が、死後のことを現在考えるはずがないと思います。お金によって、何でも得られ、享樂は思いのままの世の中です。

しかし、どんなにすばらしいカーでドライブして楽しく一時の欲求を満たしても、心の

すみに何かしら物足りなさ、淋しさが残るのが今の世の中ではないかと思います。享樂的な反面、信仰へのあこがれも大いにないとは言えないような気も致します。

そこで「どうも仏教は、死後のことばかり説くから、年寄くさくって若い者に向かない。なぜもっと積極的に現実にとり組まないのか」と疑問が湧いてまいります。

そういう意味で既成の宗教の真のあり方について考えてみなければならぬような気が致します。

わたくしは、宗教について中途半ばなことしかわかりません。心のよりどころとして、正しい方法をもって、宗教を知りたいと思っております。

いつか新聞の広告で仏教を知るための近道として「歎異抄」のわかり易い本が出たこと

を知りました。さっそく読んでみましたが、むずかしいのです。むずかしい、解らないが現代の社会の忙しさと併せて、より一層非宗教的世相をつくり、また、新興宗教の発展にはくしゃをかけているのではないのでしょうか。（新興宗教、それが良い悪いとは別にして）最近私は、世の中に偶然ということはないとしみじみ思うようになり、人と人との出会いを大切にしなければならないと思っております。

幼い頃祖母などから、よく極楽の話をかかれました。子供心にもケイケンな気持で極楽のことを想像してコウコツとなったことを憶えております。

でも戦争によって、大きなしょう激を受け若かったのと、神仏のありや否やについて疑問を持った長い期間の時代もありました。

家庭での宗教は、お年寄のいらっしゃるご家庭とそうでない家庭とにも、生活上に於ける信仰の度合が違うと思うのです。

私の家は、子供との三人の母子家庭です。私は信仰の念は持っておりますが、宗教のお話を子供にしたことがありません。（例えば食前、食後に合掌をして形の上で感謝の意を表する）

今度このテーマを頂きまして実は我が家の宗教について、ハツと致しました。なぜかと申しますと、私自身宗教に対して、さきほど申し上げましたように、なまはんかなことしか解っておりませんのです。信仰は強いられ、迫られたりするものではないと思うんです。本人が現在、又は将来その子なりに、いろんなことに、そうぐうして、或いは、深淵に立たされたとき、自分で体験し気付くも

のではないかと思いますので、特に宗教のお話はしておりません。（そのような訳で宗教的ふんいきがない生活なのです）

毎日感謝しましょうね。（夜など子供に今日一日幸福だったわね）と私が申します。

たゞウソを言わないことを三人で、いまいめにしております。

人は長い人生のうちに自分の将来を左右する岐路に血のにじむ思いで立たねばならない事があるものだと思います。そんなとき、信仰をもっていると苦しい迷いも甘受でき、自ら打開の道も開けるものではないでしょうか。

岡本一平、かの子夫妻が互に生かしておけぬほども憎しみ、断ち切れぬ宿業の絆は二人を苦しめ、人生の転機に立ったこの時、夫妻が人生の立ち直りのきっかけにつかんだ糸は「親らん」の歎異抄であったとか。

信仰というのは、決してある形式的な宗教に入らなくても、また必しも他の人と同様な信念を得なくても、自分は自分として、確かな信念を築いておいた方がよいかと思います。

心のよりどころ、それは、自分自分の中にあるものでは、ないでしょうか。

わたくしたちは、一度しか一人に与えられない人生を、毎日毎日幸福に過せるように、工夫をし、豊かに生きたいものだと、心から思いますね。



## 家庭生活と宗教心

岩 本 又 次

(尾小屋公民館長59才小松市岩上町)

1. 私は長い間学校教育にたづさわってきましたが、学校教育の中で宗教的情操を養う教育が、どんなに多くの問題をもっているかということ知らされました。公立の学校に於ては法的な制約はありますが、それにも増して牧師自身が宗教の教育的な地位をどれだけ認めているかが問題点であります。

自己の関知しない人生経験を軽視する傾向の強い今日の風潮や自分の理解できる範囲内だけで自己主張をしようとする狭き感覚が、一段と宗教教育の前進をはばんでいるようです。教育は子供の部屋よりとか、生活が陶冶すると叫ぶ教育者が母の胸や父の膝の上で養われた宗教心の芽生えに無関心ではならぬと思います。

私は学校をやめてすぐ学校教育のことを云々するようで一寸心苦しいのですが、今後は今少し学校教育に於ての宗教の地位について眼を開いていたいときたい願うと共に宗教心の芽を出させこれを育てる最良の場所は家庭であると言いたいのであります。

2. 現今は学校教育の中において宗教的情操を養い、宗教への理解の芽を育てんとする気風の少ないことは申し上げた通りであります。宗教への関心の少ないことは学校のみではないようです。

日本の社会一般が仏教に無関心な面が多く有識者と見られる人の中にも無宗教・無信仰を自慢げに話されている方も見うけられるわけであります。

また仏教の真実を求めないで、宗教の在り方や施策の善悪を論ずることが、仏教に理解

ある態度だとする行き方もどうかと思うのであります。

しかしこんな風潮は必ずしも社会一般の人だけの責任ではなくて長い変遷の間に仏教教団も、独善化や、主知化や、寺院化がなされていないかということも考えなければならぬことです。大谷光紹師のお言葉に、

「日本仏教団の仕事は、特に真宗教団は釈尊の教えを信者に理解してもらうことにつくる」

といわれたように正しい法への理解なくして仏教の興隆はあり得ない筈であります。

私は秋山秀夫氏の

「宗教的法悦はおそらく人間に与えられた快感の極限であろう。しかし、いわば之れを徹底的にしない人には分らないのである。有難い、有難い、と随喜の涙を流している人を客観的に見ると現実的にはもつともみじめな生活をしている人であるのに驚くであろう。凡夫の眼から見ると悲惨そのものであるものが、有難くなればその人は救われたのである」

と私はこの言葉に深い感銘をうけました。この言葉の中に驚きという一言がありますが、驚異は信仰の最愛の子供である、といわれるように、只見逃していた生活から驚きの眼を輝かさせてもらえることは、

不可称、不可説、不可思議といわれる尊さの極地をのぞく心の窓が開かれる因と思うからであります。

3. 宗教心の育成には家庭がその役割をもつべきだと申しましたが、家庭とその生活につ

いて考えて見たいと思います。

世の中の家庭には形の上においても内容においても、いろいろの型がありますが、どんな類型であっても家族の人達は家庭員としての人間関係があるわけでありす。家庭生活は性愛によって結ばれた夫婦、血縁につながれた親子、兄弟姉妹の生活体で、まとまりのある家庭であっても、ない家庭でも、原始的な風のある家庭であっても、文化的な風の家庭であっても、他の社会の人達と違った人間関係があって、功利や打算をはなれ、また規範以外に生きることがその特質であります。

親でなければ出来ないこと、子でなければ出来ないことが、不知不識の間に繰返し繰返し行なわれていることが、家庭生活の本然の姿であります。生れ落ちた時からこの純愛関係のきづなにつながれている子供の生活は家庭生活によって人としての素地が作られるわけであります。世の諺にも「三ツ児の魂百までも」と言われているのも家庭生活の一生に及ぼす大きな感化力を言表わしたものと解すべきでしょう。

4. 家庭教育の根本は何としても親の愛であるということです。特に愛という時には極めて限らない愛情をさしている時が多く家庭生活の色深き香高さ味濃さなどは往古より画に描かれ詩歌に歌われています。

「親思ふ心に勝る親心 今日のおとづれ何ときくらん」とある歌の中ににじみ出る親子の愛情が偲ばれるわけであります。

しかし実際には必ずしも愛が愛らしく現われていない朝夕平凡な生活の中にも家庭教育が行なわれていることを見逃してはならないと思います。

それは家庭生活をしている中に各家庭の個

性が家庭員を陶冶するからであります。

一つの社会に特有の社会意識ができるように、どの家庭にも独自の家庭意識ができそれがその家庭の個性を作りその個性が家庭員の生き方まで支配するようになるともいわれます。しかもその個性の内容がすべての家とも優秀とは限らず、又必ずしも時代にふさわしいとも限らないのでありますし、望ましいものであるとは言えない場合もありますが、この限定のあることが、人間育成のために必要だとされていますし、そしてこれが家庭教育の特殊性とされているのであります。

5. 今の人達の物の見方は科学的になっているといわれています。科学的であるために靈魂の不滅ということにしても一種の臆説が仮定にすぎないとしています。いくら仮定でも事実の経験を説明するに役立つことならいざ知らず、それができなければ、かえり見る必要がないとさえ言うのであります。

有限・相対・不完全・不統一→の人間が、無限・絶対・完全・統一→の理想像を思慕しない姿は仏法に背を向けていると言いたいのであります。

住みよい社会を作るためには科学的な考え方の必要なことは否定できませんが、その心の奥に価値の価値といわれる絶対への随順が潜在していることを望みたいのであります。

誰しも住みにくい社会を作ろうなどと努めているものはない筈ですが、立場→立場を固守するの余り社会にひずみが生れ不知不識の間に対立抗争の因が宿るのであります。

仏法ではこの点について、仏恩に眼ざめ心の浄化がされることによって安楽国土が築かれみにくい対立抗争がなくなり、静かで安らかな人生がひらけると説いているのであります。

す。これには仏教教団も重いとびらを開いて世人の希望をきき、教団の側も世人に対する要望を卒直に訴えて閉され勝ちな布教への道を開いて行くことが大切だと思います。

6. 話は少しはずれましたが、私は家庭生活を通じて宗教心を養うにはどうすればよいかと結論に進みたいと思います。

感覚は教育の関門とまでいわれている通り  
視ること、聞くこと、嗅ぐこと、触れること、  
味うことは人間形成に大した教育力をもっています。

誠心無垢の幼時から子供を育てる家庭はこの純な感覚に出会いするものを整えて環境の浄化に心掛けることが大切であります。

数ある家庭環境の中で最も子供に強い印象を与えるのは父母の生活態度だとされています。

父母の仏教への理解ある態度が宗教的環境を作る上にも、日々の家庭生活を温かい雰囲気ですつむ上にも大切なことであります。また日常生活が神仏を中心とした敬虔と慈愛、感謝の生活でありますと子供は自然と宗教心が芽ばえる、とあるように家庭において宗教的情操を植付けようとするには宗教的行事を行うことに関心をもつべきであります。

伝統の行事は神仏を中心としたことに由来するものが多いのですから、宗教的な雰囲気は自然と出てくるわけであります。

真宗大谷派東本願寺の年中行事という冊子の中に、

正月の項には

書初や無量寿仏の御名をまつとあり  
お彼岸の処に

暑さ寒さも彼岸までという言葉があ  
ってお彼岸の頃は暑くもなく 寒く

もなく一年中一番よい季節であります  
すが このどちらにもかたよらない  
気候中正ということが 仏教の言う  
かたよった考え方や 自分中心の一  
方的な見方をしない中道であると 教え  
お盆のことについて

迎え火や 父の倅 母の顔  
の句が出ています。

一年間の行事には、

如来のこと 本願のこと 名号のこと 回  
向のこと 他力のこと 浄土のことなど 仏  
教を理解するにふさわしい内容が行事を通じ  
て知らされることになっています。

この宗教的な行事を親子共々行ううちに報  
恩感謝の心情が育てられると思います。

おわりに

宗教的なということは 決して抹香臭い  
いんうつな妙にこちばったことではなく、俗  
に居て俗に墮せず、聖く朗かな 且つ和かな  
宗教的慈愛の生活を営むことだ との教えを  
味って生きたいと念願しています。

完

## 家庭における宗教のあり方

前 川 清 一

(郵政公務員 55才 上有松)

私は年令 55才 職業は公務員、家族構成 8人の世帯主で、宗教は仏教の浄土真宗すなわちお東です。宗教に関する専門的な書物は読んでおりませんが、宗教に関する講演会に出席したりお寺詣りなどをしております。私にとって仏教は現在もなお「強く生きぬくための願いの対象」として守り続けておりますが、この仏教をいかにして家族に受けつがせていくか、この課題を解決するために研究室に通っておりますし、本日の問題として提起した次第です。

この幼稚な問題に対して皆様方から肉付けをさせていただきようお願いいたします。

私の家の仏教のあり方と申しましょうか、私が守り続けてきたその理由をまず申し上げます。現在私の家の仏壇には 8人の法名が掲げてあります。そのうちの 6人は私が独身であった 26才までのものです。2才に姉、4才に実母、10才に第二の母と弟、25才に弟が戦死、26才に父が 58才でそれぞれ死亡しております。このようにたびかさなる肉親の死により父の仏壇に対する態度、お寺詣りする回数が多くなっていくなどその真剣な姿が私の目に強く印象づけられているのです。その父からは仏教についての感想や肉親を失ったことについての愚痴らしい言葉が聞かされたことはありませんでした。近所にキリスト教信者がありまして教会へ幻燈を見に誘われていったことが知れて叱られた記憶がわずかに残っております。父とは逆に私は実母に甘え父を頼りに弟とも力を合わせ、そして妻を持ちたいというその平凡な願いが、26才

で消えたことについて人一倍愚痴をいいました。

このような家庭の中に育った私には人間にすがっていいのか、人間を頼りにしていいのか、うがった表現ができませんが、子供心に人間を越えたはるかなものを求めていた……それが仏教として芽生え、そして青年時代とともに成長していったのだろと思うられるのです。はんもんし続けた青年時代におけるお寺詣りが、また橋本(芳契)先生が学生時代に四高の講堂で司会された仏教の講演会が、そして友松円諦先生が講談社発行の「雄辯」の雑誌に「希望を失ひたる若き人々に檄す」などが、当時の心のささえとなり、強く生きなければならぬその願いの対象として仏教に方向づけたものと思われるのです。父がレーンを敷いた 58年とそれに私の 28年をプラスしたのが私の家の仏教の歴史なのです。さて現在の私の家の状態はと申しますと朝夕仏壇のお詣りは私で、不在の時は妻が代理をつとめますが、お寺詣りにしても連れがあれば同行する程度で、さて一人ですと、51才の妻は老人ばかりのお寺へはどうかといっています。高校生の二男は仏壇にお供えた果物、菓子類は食べようとしません。私が守り続けてきた仏教の根をおろそうとすることが今のところ困難なようです。父や私の仏教は肉親の死に多く接したことが主な原因だとすれば、現在家族等には死を現実に見つめたのは一回だけで、それも天寿を全うした 84才の私にとって第三の母の死亡だけあります。何かにすがらなければならない、何

かを頼りにしなければならぬといっても、私等夫婦が健在なだけに私等を越えたもの、法名を通してはるかなるものを対象にせよといっても私の神通力の効き目はないうです。仏教をわかり易く吸収させ、そしてそしやくできるようにするにはどうしたらよいか。奥深い研究は別として単純なそして軽々しい考え方だといわれるかもしれませんが、私はこう考えたいのです。鏡の前に立つと自然に姿勢を正す習性が人間に具っているように、家庭の中にも姿勢を正すことに習性となる対象のものがほしいのです。丁度天皇を日本国の象徴として敬慕しているように、また会社、団体等に社訓、信条 motto がそれぞれある

ように、その前に立ったら、それを読んだら自然と姿勢が正される。私はこの対象となるものを仏教と呼ばしていただきたいのです。そしてこの仏教を茶の間の中心として祖母が伝え、父が語り、それに対し子供や孫から批判され話し合うことによって、しらずしらずのうちに、肉となり骨となっていくようにしたいと考えるのであります。そうすることがすべての宗教的情操は生命の根源のうんぬんと書かれてありますところの期待される人間像の形成にも結びつくのではないかと信ずるのであります。以上つたない発表を終わらせていただきます。

## 宗教のお育てで過したわが半生

家 奈美子  
(主婦 57才 小立野)

橋本先生から、おはがきを頂き、何を話したら? と思っている中に四・五日はすぐたってしまいました。  
主人にはがきを見せると「仏壇もない家で暮らしている現状では、話す資格がないでしょう」という。それなのにおこがましくこうに立ちましたのは、私の育った環境をふりかえてみたいと思ったからなのです。

私は25才の父と18才の母の間に生まれました。若い二人は、開店早々の理髪店に熱意はあったが、仏壇の前に坐る事などなかった。でも母親は毎日を感謝して暮らしていました。幼時期を迎えた私は、よく母の料理する魚や鶏を見て「可哀そうにネ、!」といったものです。その度に「これは人間の体に入って始めて仏になるのじゃ、それで鶏も魚も喜んで喰

べられているのだよ」ときかされました。  
小学一年生の頃、日が暮れてからしんせきへお使いにやらされました。しぶしぶ出て行くと、近所の小父さんが私をからかって「そこへ行くと、利助サの小路からおばけが出るワ」といいました。「そんなものおらんわいネ」というたものの電燈もない頃の村は、お店やさんの前だけがうす明るくて他はくらやみである。どうしても足が前へ出ずとうとう家に戻ってしまいました。すると母は「あんたの側にいつも神仏がついていて下さるものの、おばけの方がこわがって逃げて行くわいネ」といい聞かせて元気づけてくれました。それで再び出かけて行きました。  
小学校五年の秋、血膜炎を病んで八軒も離れた村の眼科医へ通院しました。毎日好きな勉強を放棄して早退し、中食をすませて出かけ

ると、高台にある冢校から午後の始業の鐘がひびいて来る。たまたまなくなつてこみ上げて来る涙を、ぐっとのみこんでは足を運びますが、日足の短い秋の事故、帰路はいつも夜路になりました。然し、幼時期の母の言葉が、必らずよみがえって来て、元気づけてくれたものでした。

又、その血膜炎がホシ眼になり、とても長引いたので、六年生の卒業式を終えて、金沢の大学病院へ入院する事になりました。入院する前に、大岩の不動さんへお参りしようといつて母と二人で出かけました。三月の立山々ろくはまだ深い雪に埋もれポタポタ雪が降っていました。そんな時に、母は朝まだ暗い中に、滝に打たれて私のために修行をしてくれました。そこに二泊して、病院へ入院しましたが、家に帰った母は、私のために行(ぎょう)を続けてくれていました。

長じて師範学校へ入りました。ある日風邪をひいて二日間欠席しました。その枕元へ後席にいたSさんが見舞って行きました。その頃寄宿舎に盗難さわぎがあり、Sさんがあやしまれ、その人に見舞われた私も、関係あるように名前を出されたそうなの!! その時全員の所持品検査がありました。私の番が来たので、一々品物を取り出してみせている時、机の中の箱をひっくり返しました。舎監が異様な目で、「それは？」と口をはさみしました。

母が「年生まれの人のお守り仏さんだ」といって、持たせてくれた、不動尊のお守りが入っていたのです。

何をとがめられ、どんな品物があつたのかも確めず、とがめられた事だけを、室外へ出て話した室員がいたためだったらしいのです。

それを聞いた二人の友人が、心配そうに私に告げました。それを聞いたしゅん間、腹は立ったけど、やましい事のない私は、神や仏が見てござる!! と平然としている事ができました。又、その頃沢田忠信先生(前石川県教育委員)が、「君たちは、信ずるといふ体験があるか？」と質問されました。みんなだまっています。

「君たちは、あの切れる刀物を持った、床屋さんの椅子の上に、何のちゅうちょもなく、いねむりしながら、顔をそつてもろっているだろう!! 信ずればこそだよ、信ずる者の安らかさだよ!!」

なるほどね、/ となつとくはしたものの、体験ではありませんでした。然し、私の人生航路の一つの灯となつていられると思います。

青年期に入り、自己の追求が始まり、信について考え、真を求めてさまよつた時、私の宗教心はふくらみ始めました。

「神、共にいまして 行く道を守り……」

という讃美歌が好きで、よく歌いました。

仏教になぜ讃仏歌がないのだろうか？

何の事が解らない、むずかしいお経を読んでお葬式に出るだけで、門徒衆の上にあぐらかかっているような、お坊さんに腹立たしくさえ感じておりながら、仏に心を引かれて行きました。(註・讃仏歌はいろいろにあります。橋本)

学校を了えて実社会にほうり出され、荒波にもまれた時や、人間関係のむずかしさに泣かされた時も、しっかりと自分を支えてくれたものは宗教であつたと思います。

それにつけても、これから荒波と闘う五人の子供たちが、何に支えられて行くのか知らず

この宗教に支えられて行ってくれたら　と  
思うけど　さて、どうしたものやらという  
のが現状です。

父は45才で亡くなりましたが、40才頃か  
ら、毎日仏壇の前に坐り、お経を上げるよう  
になりました。そして、別院で石原（堅正）  
輪番さんのお話を聞いて、わしゃ信心もろう  
た　!!　　といって喜んでおりました。

こんなしっかりとした、とらえ方をしておれ  
ば途中で迷わされたり、邪宗教に走ったりし  
ないのでは、ないでしょうか!!

こうして追憶を辿ってみますと、仏壇よりも  
両親の生活態度とか精神生活のえいきょうが  
重大なように思われ、母親である事を反省さ  
せられます。

御静聴有難うございました。

## 青年仏教徒の本願

我々の人間生活の有り方を真面目に反省し  
てみますと、現代社会では楽しみとか幸福と  
かいうことを望むことのできない事実であり  
ます。いわんや現代という時機において信仰  
を求めるといことが、いかに至難なことであ  
るか。しかし我々は、人間の日常生活に一  
度び目を移して見るならば我々は如何にして  
楽しみ、如何にして幸福なるものを得るか  
とこのことのみに我々自身の命をすりへらして  
いるのが我々の日常生活であるといつてよい。  
我々の生活は、十人十色といわれるように身  
体も心のなかもすべてそれぞれがちがって  
いて、だれもみなてんでにことなる世界に住  
みながら、そこでことなつた生活をしている  
といえる。その上われわれは、そのちがつた  
ものをあくまでちがつたまゝにいかそうと骨  
おっており、そしてそのために始終たがいに衝  
突し、争うことをやめない。だから静かな  
べきこの世界が、自然いつも動揺し、いつも  
動転してやまない事実は、日々私どもの眼前  
に見るとおりである。われわれの間におきる  
いろいろな人生問題というものも、そのもと

藤　　順　　了  
（仏青　25才　松任町）

は、すべてわれわれが「異生」（凡夫）であ  
るという一点に深く根ざしていると考えねば  
ならぬ。

こうした人間生活の相互の矛盾に悩まねば  
ならぬ運命をにになっている。我々は、その世界  
を越えた、楽しみとか、幸福を勝ち取るため  
に、いかなる手段をも選ばず、その為には、  
他人の命を取るなどとは、世の常の出来ど  
とである。それは、個人的自我の欲望の満足  
にすぎず、他人を無視し、きずつけ常に他人  
からそのことによつて、うらみを受けいつ他  
人から自分の命を傷つけられ、うばわれるか  
わからず、一時も自己の安心を求めるとい  
うことは、無理なことなのです。

そういう我々の生活、即ち人間関係の事実は  
我々人間一人一人の力のいたるなさ、弱さを  
感じ、それからどうすることも出来ない。我  
々の身心の痛みを愁憂懣悴というのであろ  
うか——そういう身心の痛みなる愁憂懣悴は、  
我々人間生活の出来事の問題に於て縁起する  
のである。

人間生活上の出来事を通して、実は人間であ

ること自体から発起する問題であり、その問題の事実を我々につげ知らせようとする我々自身の場所として、我々の根源の問題をあてえかつ、それに答えようとしているのではないか。こういう人間であることを、答えようとしている我々の自己自身の根源のさけびを共に広く、深く聞いていこうとするものである。

「人知るもよし人知らぬもよし我は咲くなり」との句は、武者小路（実篤）さんが、自分のこの世に生きる心境を花に托して述べたものであろう。しかし私が今ここでこういうことを憶い出すのは、私自身が好んで愛している句で、自己の生活を反省して自主性を確立するためです。「人知るもよし人知らぬもよし我は咲くなり」ということは、一つの生活態度である。しかしこうしたことは、私どものありきたりの心でめったにいわれぬ言葉であろう。ばかりでない、実は、私どもの心からは、到底生れることの期待できぬ種類のことばであるといわねばなるまい。

もし私どもがそれを敢ていうとしたら、自分を偽っているのだとしか考えられないようなそんな厳しいものを、この言葉は、含んでいるのではないかと思う。というのが私どもにしてみると人に知られることを善しとするなら、善しとするその心で必ず人に知られぬことを悪しとするのに違いないし、又人に知られぬことを善しとするなら、きっとその心で人に知られることを悪しとするに違いないからである。

私どもの何かを善しとするなら、きっとその心で人に知られることを悪しとするに違いないからである。私どもの何かを善しとする心は、まさに善しとするそのことで、何かに反

する他のものを悪しと感じないわけにはいかない。ものごとの善し悪しは私どもの身をもつてする解釈であり、評価であって、評価を施す心は一つであるのに、その一つの心が善し悪しとの矛盾的对立を免れない心なのである。

しかしそうした矛盾する一つの心が、事実私どもの生きる常の心であるし、そういう心でしか私どもは、生きるすべを知らぬもの、つまり善しとし悪しとすることの上にこそ、私どもの主体的な生活が成立しているのだといわねばなるまい。私どもは、生きるというのが私どもの生きるのは、結局自分が身と心で解釈する矛盾の生を生きるのである。善を求めその心で、悪を恐れるその心で善を追求しながら生きるのである。

生きる自分是一つであるのに、その一つの中で、善を求める自分と悪を恐れる自分とが常に対立し矛盾しながら、生きるのである。

そしてこういう自己矛盾を抱えたものが私どもの生活意志なら、私どもの生の前進は、当然それから制約を受け、輪廻せざるをえぬということになる。そこに善を得ては生き甲斐を感じ、悪に遇うては、困惑し、苦悩するということが、絶えず私どもの生活にその繰返しのあることが私どもの生活と呼んでいる当のものなのである。

亀井（勝一郎）先生は、人生を旅とみなし、「家庭とはその旅人の旅舎だ、生活に疲れた旅びとの憩いの場である。人間を旅びとと論ずることは愛情の上に大きな変革をもたらす。人間を流転の相にみることによって、人間の愛情を越えたもうひとつの深い「あわれみ」の心で授けられる。旅びととして客観的に認識しあうところに生じた同朋意識に、あわれ



みの心が宿る」とし、その旅も「道」ということで云われ、「それは一つの道である。それは「道」のないところに「道」を求めるといふ真理探求者としての人間の姿勢である」と確定しておいでになっている。

武者小路（実篤）先生は、「花」をもって自己の生活態度を現わしておいでになる。自然の花に自他の区別がなく、人間のように善し悪しの思いの上に自己を立て、立てた思いの上に自己を立て、立てた思いに自己が奪われ引曳りまわされ、生きる道に行き悩むということもない、花はただひとたび決定された「自己」を忠実に守り、世間をよそに常に自己と一致して生き、天地の法則に従って、その無分別性をつくそうと欲するのみのようである。すべて無為自然にかなって開花するのが花のいのちの生きるすがたである。そこに花だけのもつ迷いなき者の明るさがあり、矛盾なく自己に常住できる者の安らかさがある。両先生の人生はまさに人間としてもたねばならない本当の願を選択して生きる人間として自己自身にみいだしておいで。

仏教の教えも人生を選択していく、それは、古今東西の大聖が齊しく辿った「自己を知る」という共通の大道ではなかったか。

唐の時代に、白樂天と鳥窠禪師の問答に（白樂天）「仏教とは如何なる教であるか」と問うたに答え、禪師は「諸惡莫作、衆善奉行」と。このことはいうまでもなく、「悪いことをするな、よい事をせよ」ということである。これが仏教かと、いささか拍子抜けの態で、白樂天が再問して「そのようなことは三才の童兒も、既に知るところでないか」といい、これに対し、禪師は「成る程、貴台のいうように、諸惡莫作、衆善奉行は、三歳の童兒も

これを知るが、貴台は既に童兒に非ず、相当の星霜を重ねられるが、全く惡事に縁を絶ち善事に専念し得らるるや」と責問した。流石の白樂天もこれには一本やられた訳である。仏教とは三歳の童兒すら知っていることが身についていない。それをつねに自分の身につけて行くことである。さて禪師ら二人の生涯は実にこれ以後道交を続けたという話である。人間として真実でありたいという、総ての人が心の底から納得できるものであり、同時に如何なる事態にぶつかっても崩れないものでなければならない。

こうした真実を踏む教法がとりわけ浄土真宗、親鸞の教えだと私は信じています。この現実の選択の相こそが、念仏です。人生選択の眼を開かしむるものが念仏の教えであります。

私達が人生を在りのままに正しくみていく眼を開く世界のもとを私は信仰のある家庭生活だと思っています。

## 金沢大学社会教育研究室昭和41年度の歩み

№ 3 1966・9・16—11・30

### 1. 研究員研究会

9月30日 15.30～18.30

出席 9名

#### 協議内容

- ① 美川町公民館調査第一次の反省
- ② 同第二次調査の調査課題を各自より提出し、その試案にもとづき検討した。  
なお第二次調査は今後小委員会（委員は神力・永守・岩男・出雲路の4名）で検討することとした。

### 2. 社会教育調査

美川町公民館第二次調査小委員会を

10月13日・17日・27日・11月7日・

に開催し第二次調査の基本線を中心に検討した。

### 3. 年報・季報の発行

- ① 『社会教育研究』第7号を発行

A5・202頁

発行日 昭和41年9月30日

発行部数 500部

#### 内容

公民館調査—石川県美川町の場合

共同研究

昭和初期の石川県における農村青年

の学習について 小松周吉

コパーレ＝アーレンスの「自由ドイツ青年運動年代記（Ⅰ）—創立より第1次世界大戦に至る渡り鳥同盟—」  
増永良丸  
金沢大学社会教育研究室農村問題研究会の学習活動

南好彦

出雲路暢良

昭和40年度金沢大学社会教育研究室の歩み

- ② 『金沢大学社会教育研究室季報』第14号を発行 B5・62頁

発行日 昭和41年9月30日

発行部数 450部

### 4. 共同研究会

昭和41年度研究テーマ

現代社会における家庭の問題

—今日の社会に対し家庭は何をなしうるか—  
第3回

日時 10月1日（土）13.30—16.30

会場 金沢大学教育学部会議室

テーマ 社会経済の中の家のモラル

担当部会 社会思想研究会

出席者 36名

討議内容 季報十五号（当号）に掲載

#### 第4回

日時 11月5日（土）13.30～16.30

会場 金沢大学教育学部会議室

テーマ 人間形成における家庭の地位と  
役割

担当部会 家庭教育研究会

出席者 38名

討議内容 季報15号(当号)に掲載  
第5回

日時 11月26日(土)13.30~16.30

会場 金沢大学教育学部会議室

テーマ 家庭のなかの宗教のあり方

担当部会 仏教思想研究会

出席者 31名

討議内容 季報15号(当号)に掲載  
(出雲路記)

相談して、11月20日以降に開催する。

○第3回山島研究会 10月21日(金)

18.30 - 20.30

会場 山島公民館 出席者 21名  
協議内容

農家経済と都市勤労者世帯の経済の違いや、村づくりについて、お互いの信頼感がどう変つているか。あととりを含めての職業観、消費生活(冠婚葬祭等)の不合理性等について、山島の生活を中心として話し合われた。

○第3回テキスト学習会 10月28日(金)

17.30 - 20.00

会場 県社会教育センター 出席者  
6名

学習内容

「日本農業11話」中の第3話 政治のなかの農産物価格について学習、石井先生から、工業製品は生産性があがつているのだから価格はもつとさげてもいいはずである。

農家は農産物の価格よりも利益がほしいのだ。日本の農家は単に労働生産性をあげるだけではないので、経営生産性も同時にあげることを考えねばならない。食管赤字とはかく問題になるが之は農民と消費者両方が背負っている。然も一般会計の2割位のものであるから社会保障の性格をもっている。等の助言があった。

#### 5. 農村問題研究会

助言講師 金沢大学教授 石井俊之  
石川県農業試験場長中川竜一

担当教官 金沢大学助教授 南 好彦  
同 講師 出雲路暢良

○ 農村問題研究会小委員会 10月4日(火)  
13.30 - 17.00

会場 社会教育研究室

出席 山崎、金田、前坂、青山、南  
協議事項

① 農業問題研究会議については、農村問題研究会が主体となつて11月開催する予定にしていたが、種々検討の結果、経費の面で無理な点があり、又研究生が夫々多忙な時期でもあるのでとりやめるが福井で開催される場合はできるだけ参加する。

② しばらく休んでいたテキスト学習は今月から始める。

③ 山島研究会は、山島公民館米田主事と

○第4回山島研究会 11月7日(月)

18.30 - 20.30

会場 山島公民館 出席者 20名  
協議内容

「山島の若い者をどうみるか」というテーマで話が進められた。そして具体的な話題を中心に、明治、大正、昭和にわたつての農業観の問題や、今日の農業は単に生産技術のみでは解決できないと、新しい時代の農業、商品生産としての農業に対するとりくみ方等について話しあわれた。(南 記)

#### 6. 家庭教育研究会

指導教官 金沢大学教授 神力 甚一郎

(三島教授が外国出張のため不在となり、第6回以後は神力だけで指導にあたることとなつた。)

第6回 9月16日(金) 出席者13名

テキスト 勝田守一著、「家庭の教育Ⅰ—教育とはなにか」(岩波書店)第2章

子どもの能力と発達

- 発達の段階について
- 幼児の発達の特長
- 少年期の発達
- 青年期の発達
- 女の子の能力と発達

第7回 10月14日(金) 出席者14名

テキストの第3章 家庭の教育と子どもたち

- 家庭の役割
- 情動の安定のたいせつさ
- 感情と知能
- 親の要求が子どもを育てる
- 生活のリズム

(学習終了後、第4回共同研究会の企画と運営について相談した。)

第8回 11月18日(金) 出席者12名

テキストの第3章

- 性格の形成
- 家庭の城
- 子どもは困難をのりこえる

第9回 12月9日(金) 出席者 6名

テキストの第3章をおわる

- 伝統と知恵
- 若い世代の愛国心
- 家庭から社会へ
- 保育園と幼稚園

9月以降研究会に出席するメンバーも固定して、メンバー相互の親近感もまたたために、話し合い、経験の交流、意見の交換も活発に行われるようになり、楽しいふんいきのなかで学習が進められるようになった。

(神力 記)

#### 7. 社会思想研究会

指導教官 金沢大学教授 戸頃 重基

テキスト 戸頃重基著『現代の組織悪』

10月22日(土)テキストP 118-130

多数決原理の正統性について教授、終つて質疑応答

11月12日(土)テキストP 118-130

家庭集団のエゴイズムについて教授、終つて質疑応答

12月17日(土)テキストP 130-146

解体期の家族制度 新しい親子関係について教授、終つて質疑応答

午後3時からグループの忘年会。

(戸頃 記)

## 8. 社会心理学研究会

指導教官 金沢大学教授 沢田 忠治

### 第5回

日時 10月15日(土) 13.30 - 16.30

参加人員 28名

テキスト 南 博著「社会心理学入門」

### 学習内容

1. パーソナリティーの構造
  - 性格、能力、気質
  - 社会欲求、社会的能力、社会的知性、社会感情
  - 自我感情
2. パーソナリティーの形成
  - 習慣、習性(中心的習性、周辺の習性)
  - 自我意識

### 第6回

日時 11月19日(土) 20日(日)

参加人数 22名

場所 和倉 過雁荘

### 学習内容

- ① 家庭内の人間関係
- ② 家庭内の宗教問題
- ③ 子供のしつけ、教育の問題
- ④ 幸福な家庭作り
- ⑤ 老後の問題
- ⑥ 人生経験、自己の悩みの発表
- ⑦ 和倉の老人ホーム見学

以上の如き種々の体験を発表し、互に討論し、会員相互の親睦を深めた。参加者一同は有意義な集会であつた事を喜びながら解散した。

### 第7回

日時 12月3日(土) 13.30 - 16.30

場所 社会教育研究官

参加人数 28名

テキスト 南 博著「社会心理学入門」

### 学習内容

1. 集团的習性
  - 家庭文化的習性、家庭個性的習性、職業的習性
2. 現代資本主義社会に於ける自己喪失、自己疎外の問題
3. 資本主義社会の階級的習性
  - 体制的習性(地域的習性、国民的習性、民族的習性)

(沢田 記)

## 9. 仏教思想研究会

指導教官 金沢大学助教授 橋本 芳契

1) 9月17日(土) 午後1.30 - 4.30

行事① 前回(7月30日芝垣妙成寺集会)の反省-夏季を利用した適切な臨地研究会で、参加者も7名の男女学生をまじえて計25名で盛会であり、議題の「生活の中の宗教」も現下の実際問題としてお互に論じ甲斐があつたということ。その成果をさらに共同研究にもちこみたいということ。

② 第5回共同研究について - 意見発表から問題提起とそれにとづく討論研究についてほぼ次の発表者を互選決定した。(但し発表者の人数と順序については再考のこととす)

1. 島口雅光(住職) 金沢市

2. 岩本又次(前校長) 小松市
  3. 家美奈子(主婦) 金沢市
  4. 藤 順了(仏教学会) 松任町
  5. 前川清一(実業) 金沢市
  6. 細川忠蔵(在家庭) 金沢市
  7. 中田きみ子(主婦) 金沢市
- なお、谷口喜一(鹿島町久江)校長に司会を依頼することにした。

論議 仏教思想研究は、単に各人の研究にとどめず、日常生活の経緯を通じて体験的に世間指導に発展さすべきである。次回の共同研究は、そのためにこれまでこの研究会がなしてきたことの整理であるとともに今後の方針をきめるよい機会であるというのが大勢をしめした意見であつた。

参加者 西田忠信(鹿島郡中島町)ほか  
1.4名

2.) 10月15日(土)午後1.30 - 4.30

行事① 橋本指導員から、宗教用語「聖と浄」について約1時間説明あり。聖も浄も中国語(漢字)であるが、日本語としては「ひじり」「きよし」などよむ。具体的には聖道と

浄土の問題であるが、現代にはこのふたつ(二法門)はさらに新たな近づきと前進を求められているのでないかということ。

② テキスト(仏教聖典) P 53 -

55 の学習。内容は、第2編「教法」中、第1章「因縁」の第2(因縁生)、第3章(縁起)の両節で、原典的には般若経と華嚴経と地品ならびにパーリ増支部

(Anguttara Nikaya 3.61)である。

論議 この日の学習を通じ、仏教用語ひいては宗教用語の語義語源をあきらかにしていくことの意味およびその必要を明確にし得、さらに因縁とか因果とか、あるいは果報とか日常用いることばの本来内含していた仏教教理上の思想的意味を知りわけ、一層に学習意欲を増すことができた。

参加者 黒崎松枝ほか11名

3) 11月26日(土)午後1.30 - 4.30

今回は研究室の第5回共同研究にあてたので、別項記録にゆずる。(橋本記)

## 編 集 後 記

### 主 事 記

本年度の新しい試みとして始めた「共同研究会」を予定通り五回滞りなく終えることができたことを喜びたいと思います。各回の記事はその都度季報に掲載したので、出席されなかつた方でも、そのアウト・ラインはつかめていただけるかと思います。今後この「共同研究会」をどのように育てて行くか、研究生の方々とともに考えたいと思つていま

す。いま一つ新しい試みとして「季報」のなかに「研究生の頁」を設けました。これは研究生の有志の方からの自発的申し出でが機縁で設けられたいきさつもあり、研究生の利用を鶴首しています。

この研究室の研究事業年度から申しますとあとなお三ヶ月を残していますが、暦の上では1966年もこの「季報15号」の発行で

暮れようとしています。

年明けてから、例年のように、翌年度の研究活動計画予定表作製のため、前年度の反省をふまえて数回にわたる討議を研究員間で交

わすことになりますが、研究生でご意見がございましたら、もよりの研究員の先生にまでお申し出で給われれば幸いに存じます。

昭和 41 年 12 月 25 日発行

編集兼発行者

金沢大学社会教育研究室主事

新 谷 賢 太 郎

印 刷 所

前 田 印 刷 株 式 会 社